

4 成所作智

〈1〉 成所作智

感覺作

作智は大體より云はゞ絶對寫象、物心二象と現じたる感覺的態にして、物質より發する分子動が主觀の分たる感覺機能に感觸すべき態にして、之を成所作智と名づく。

天則に理性には現象界に主觀客觀の二象と現じ、歸趣の理性としては觀念即ち靈界の顯現にして、即ち心眼及び心耳等の實現なり。

天則理性の感覺の現象は五官及知覺運動神經等の組織の中に感覺智態を作智と名づく。

六入

六入即感覺機能を入と名づくることは、感覺智態が五色聲等の極微の分子を吸入するが故に入と云ふ。

六入本如來藏の作智の所現なり。若し感性なき時は極微分子盲動なり。感覺なき時は分子は如何なるものぞ。太陽の光も盲人には其の明あるを感じず。

楞嚴に眼入即ち藏性作智の所現なりと、人の眼が明と暗との二塵に對して見て、此の明暗の塵を吸ひて見る。明暗を離れては體なし。この視覺は物象より來るや、將た眼根より生ずるや、明の分子動かずしては太陽の明も感覺すること能はざるべし。人の眼球機能は神經等で物質分子の集にして外より來る處の物象即ち光明等の物色は物より發動する分子なり。兩方共に物的分子の集りのみにして眼視覺あることなるべし。

然れども眼の物質機能に、作智態の、意志によりて實現したる色塵分子と、視覺とにして眼及び神經等は智態の力的實現なり。

聽覺の聲に於ても音聲は物にあるか耳にあるか。例へば鉦を打つに音は鉦にあるか耳にあるかと云はゞ、耳にて聲を感覺す。鉦の分子動を發して響動は空氣に傳はりて波動して人の鼓膜を打ち鼓膜は之を腦に通ず。こゝに於て聽覺となる。音聲は物にあらず、分子動は客觀智態にして、分子渉入する聽官機能にある感覺は主觀的智態なり。

鼻の嗅覺を感じるは、諸の香臭の氣を感じるも、香臭の分子動は香煙より發す。此の分子動は客觀

的智態にして、主觀の感覺に涉入して嗅覺となる。然れども嗅覺は全く鼻にあつて物に非ず。嗅官は中に主觀的感性あり。

舌官能く味覺をなす。甘苦等の物質分子の舌神經に交渉して味覺を生ず。物分子に含有せる客觀智態が人の舌神經に含蓄せる主觀的智態に涉入して味覺を感ず。

觸覺皮膚に物の冷暖等を觸るゝ時は、皮膚の知覺神經に物的分子の振動を傳へて冷暖を感ぜしむ。物質の分子は客觀智態にして、皮膚に主觀的智態あるものとす。

感覺は主觀の方において、之が材料となるものは客觀より供給せらるゝ物の分子と自己の主觀の神經との平等なる時は感覺なし。

人の物の性を識るものは、物に非ずして主觀にあり。客觀より受くる主觀の感覺なり。色聲香味觸法皆爾り。冷暖も香臭も方圓の狀も高低の狀も悉く人の感覺にあり。此の感覺が物質分子との交感につきて好惡愛憎の生ずるは、生理規定に起因するが如し。

或唯心論には、一切の法は唯識のみにして心の外に何物も有るなしと。されどこの一片に執すべからず。主觀の感覺に拘らずして物質の分子動は依然として存せり。然れども物質の性質を感ずるは感覺を離れては有るなし。

若し人の感覺なからんか、好醜の色に於ける聲香等の分子あるも、色もなく聲もなく香味觸法もなく太陽の光も熱も感ずるなく雷霆鳴れども聲なく、若し一切の感覺性を滅し去らば色もなく聲香味觸もなき唯分子動、物體動が相互に衝突し反動あるのみならん。すべての色聲等は作智の所現なり。然れども作智は主觀のみに存すとすべからず。客觀界物質の分子動なくして感覺をなすことなければなり。

物質分子動は作智の所現

物質及び分子は本絕對心靈の所變にして一切作智の所現なれば、物質は皆活きて動くなり。太陽より發する光線も電氣も皆物質の分子動なり。分子動が運動し活劇して吾々に對する作用を發す。罐の中に水の分子動き、水の分子は火を燃すが故に熱の分子を發し、熱と水との分子動の蒸氣力を發し、機關を運轉す。太陽の光線の如きの強度なる分子は人の視覺に刺撃し明暉を感じしむ。熱の分子動は膚に暖熱の觸覺を起こさしむ。電氣の分子動は人の耳の鼓膜を傳ひて聽覺を感じしむ。梅檀香木の煙の分子動は鼻神經に刺撃して嗅覺を感じしむる如き、又鐵の分子は常に鐵の中に活動して、アトムは鐵の中に分子動を起す。鐵の中に自ら分子動が微細にして人の聽官之を感じること能はず。若し鐵を

打つ時は鏘々と響あるは、分子と分子との刺戟より起るものなり。香木分子動は木の中に動いて居ると人の嗅官に感覺せしめざるも、之に火をつけて焚くときは忽ち香分子を發して、嗅官に著らかに覺せしむるに至る。

視官には色と感じ聽官は聲と覺し、嗅覺に香味と感じ舌官には味と感じ皮膚には觸覺と感ず。物體より發する處のすべての極微の分子の響動は、常に作智態の故に、自ら活動して作用をなす。

十二入

物質の極微分子と人の主觀の感覺とは、本來同一作智の主觀客觀の兩方面に現じたるものに外ならず。物質は即ち客觀觀念態なり。物質より分子動を發す。人の心は主觀的觀念態なれば、この同一の觀念の物心二象となり、此の物心に作用、物體の分子動と心體の感覺作用とは互に交渉して感覺作用をなす。

客觀作智態即ち分子動が、主觀作智態の感覺に交渉し、初めに例へば太陽の光線分子は人の視覺より腦に達し、視覺を實現する如き、客觀の分子動のみにして主觀の感覺なき時は一切の感覺色も臭もなきと同じく、客觀作智の分子動なき時は感覺の材料あることなし。物質分子動は感覺の材料にし

て、もと能所致一なり。人或は謂はん、分子動は物的の故に感覺とは別たらざるべからずと。曰く爾らず。彼は感覺の材料なり。材料なるが故に感覺に非ずと云はゞ、感覺あることなし。例せば炭素が酸素を吸入して光明を發するに、酸素は火の燃料なり。燃料の故に明に非ずとせば、燃性なくして明を發すべきものなければなり。故に客觀の分子動と主觀の感性とは同一の作智態なり。若し共通の性なき時は相互の渉入すべき能あるなし。能感の心と所感の物象と渉入して感覺を起す。

楞嚴に六入の性本如來藏妙眞如の性なりと。又十二處本如來藏。

處とは方隅の處所なり。五官機能を内の六處とし色と聲と香味觸を外の六處とし、天則の感覺機能現象世界の依正を以て處とす。二乗は方便の依正を以て處とす。菩薩は實報の依正を感覺するを處とす。

客觀の物象と主觀の心象とは本同一の性なるが故に交渉して感覺を生ず。異相となるが故に感覺す。絶對本質には同一にして相待には物心相反する二性とす。

眼と色と處所。祇陀林の諸の泉池を觀ずれば、物色の分子が眼官を生ぜしむや、但しは眼官より物色を生ずるや——乃至、物色の分子も眼官機能も二處共に藏性眞如の所現なりと。

乃至聲塵の分子と、耳官機能も香嗅の物質の分子も、鼻官を構造せる物的分子食物の分子と舌官分

子と身に觸覺的物質分子とは、本皆如來藏性即ち作智態によりて感覺作用起すものにして、物質もと死物ならば客觀と主觀との分子の衝突するのみにしていかでか感覺作用起るべきものぞ。

十八界本如來藏の作智態

界とは五官と、五極微分子の刺撃によりて感覺を生ず。感覺を生ずるを界となす。五官能と五塵と感覺との三つ各々種子あり、各族種をなす。

眼能と色塵の分子との交渉によりて視感覺を生ず。之を眼識界と云ふ。此の亦眼根即ち視官機能を構造すべき質料の物質分子と、客觀の色塵即ち物の分子動との交渉によりて、眼識界即ち視覺の世界と顯はれ來りし、宇宙現象界の、肉眼感覺の及ぶ所を、眼識界と云ふ。物的分子より組織せられたる眼官機能と色塵は物質にして、眼識は心象なれども、物と心とは本同じく藏性が作智態の所現にして、能所同一性の兩方に現はれて眼識界と現はれたるなり。

耳識界も同じく藏性作智の所現なりと云ふべし。耳即ち聽官機能は物質分子より組織し、聲塵即ち物質分子の波動との關係なり。

聽覺即ち耳識界となる、此亦同じく藏性智態の物心二象と現はれたるものとす。鼻根即ち嗅官の香

嗅の分子との渉入に鼻識界を現じ、舌根即ち味官が物質分子の味によりて味覺即ち舌識界を現じ、身體の知覺運動神經等の物質分子の組織と外物との關涉によりて觸覺を現ず、之を身識界と云ふ。

意識界とは、交感神經と客觀の五塵の感覺との交渉によりて、感情知力を現ず。頭腦分子及び交感神經のその物質分子と、客塵とにより種々の感覺より、經驗する處に知覺を起す。之を十八界と云ふ。本藏性作智態が主觀と客觀との交渉の中に之を分つ時は、かくの如きの界分をなすものなり。

六入と十二處と十八界は藏性の感覺作用に關するものとなす。六入十二處十八界は天則の理性に客觀と主觀との兩方面に現じて分別し致一す。若し能と所と分別なければ、色と視覺と感覺することなし。若し致一なければ、眼官と色塵とは交渉して感覺する能はず。

藏性作智態は、また十二處十八界と現じて、宇宙現象界に種々の活劇を感覺せしむ。

楞嚴文句に藕益師曰く、佛の十八界は佛眼佛耳乃至佛意、佛色佛聲乃至佛法、佛眼識乃至佛身識を成所作智と爲す。佛の意識は妙觀察智なり、佛の意根は圓智性智と爲す。菩薩の十八界は法眼法耳乃至漏無漏の色乃至漏無漏の意識界なり。聲聞緣覺の無漏の十八界。

人天の善有漏の十八界四趣の法界は惡有漏五陰乃至十八界。

成所作智中五官分子

物質分子と人の五官能との交渉によりて感覺作用を起す。感覺は人の心にありて物にあらず。人が火に觸るゝに熱きは人の皮膚の神經にありて火自ら熱きを起さず。また眼が火を見れば光あり。此の光は火に在るや人の眼にあるや、光の性質なるや人の感覺なるや。人に感性なくば火の光何にかある。また火の燃えるに音あり此の音感覺するは耳にあり。

物質より色聲香等の極微の分子、即ち火の分子が眼に傳ふ、是火光と感じ、分子の響が空氣に傳はり、波動を生じて人の鼓膜を打ち神經より腦に傳達して腦に響感を發す。若し人の方の五官なかりせば、物質分子が發散して擴がりゆくのみにて、色もなき聲もなき香もなき味もなく冷熱もなくすべての色なし。故に經に心生ずるが故に種々の法生じ、心滅するが故に種々の法滅すとは、此感覺作用は成所作智の妙用にして物體には非ず。

客觀觀念態が力に實現せられたる物質なれば、物質皆活けり。客觀に物質の極微の分子は色聲香味觸との物體より發現して、主觀の感覺性に交感して感覺を起さしむ。客觀物分子として發現するも、主觀の感覺作用とは同じく作智の物心の二面の作用に外ならず。此の分子と人の感覺とは實體と精神

とに屬する性能にして、實體より分子即ち感覺の對象なるものを發現して成所作智の象即電氣光線等は物質の分子動なり。

汽罐の水の分子の躍る熱も同じく分子動なり。火より發する分子動と水の分子動と、また鐵の中に分子も動く。アトムは鐵の中に在りて活躍す。鐵と鐵と打つときは響を發す、響は極微の分子が相互に觸れて發す分子動なり。極微分子は其の性の適する者が抱合してまた交々極微分子は舞踏し、また分子動は響いて音となり、視官に觸るれば色となり、青黃等の色となり、音響となり香嗅や甘辛の味覺となる。

作智の歸趣の理性 淨土の五妙境界

天則秩序の統一理性なる一切作智によりて造化せられたる萬有は、終局目的ある手段として生産造作せられたり。されば萬有の作智に摸塑せられて之を造化せられたるも、此の目的は心靈的精神生活を作すに歸趣せしむるにあり。作智の要は人の心靈が本にして萬物は末なり。心靈の中に感覺作用が作智の主とする處なり。

人の天則的の感覺には靈妙な靈化すべき性能あると共に垢質ありて覆はる。故に天然の人には作智

の妙用より變作する天然感覺方面のみを感覺することを得て、觀念界と宇宙に微妙不可思議の靈感覺態あることを感ずること能はず。若し人心靈開發して超自然的に美化する時は微妙なる莊嚴不可思議の妙象界を觀ずることを得べし。

信論に説くが如し、如來は本第一義諦にして用相の得べきなし。但不可思議の徳用ありて種々色聲等の感覺態を示現すと。淨土五妙境界の妙莊嚴象は如來作智の所現の如實に靈化せる心靈に感覺する象を示したるに外ならず。

前に云へる如く、自然界に於ける感覺に於ても宇宙萬物の物質の分子が常に動きて波動をなすも、人の感覺にして絶無なりとせば、太陽も光明なく、また溫觸の感なく雷鳴も音なく分子の波動あるのみならん、之を青黄の色彩また音響香嗅等を感じるのは人の感覺にあるのみ。さればとて分子動なしと云ふに非ず。客觀の分子動と主觀の感覺とは、同一性の物心二面に現はれたるなり。

如來また常に作智が本然として内外兩界に於て作用を施し、一方に清淨國土を變作し心靈化せるものに感覺せしむ。斯くの如きの靈妙の感覺界は純粹理性には之を認むること能はざるも實行理性には之を發見することを得べし。

起信論（の意）に曰く、かくの如きの用とは自然に不可思議の業種々の用ありて眞如と等しく一切

處に徧す。然れども用相の得べき有ることなし。何となれば如來は唯是法身智相の身第一義諦世諦の境界あることなし。故に作意を以ての施作を離る。但衆生の見聞に益を得せしむるに隨ひての故に説いて用とす。此の用に二種あり。一に凡夫の爲に應身を見て是心理作用の所現としらずして、全く外より來るものと見とめて單に色相のみを見て理の所在を識らず、即ち之が本體は智慧態の所現なりとしらざるなり。二に菩薩の所見を報身となす。身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好ありて、所住の依果に亦無量種々の莊嚴ありて、示現する處に隨ひて即ち邊あることなし。窮盡すべからず。分齊の相を離れ無所應に隨ひて常に能く住持して散せず、失せず。復次に凡夫の見る處は但だ塵なるのみならず六道共に各々其の見る處を相同じからず。種々の異類と現じて受樂の相に非ず。故に應身と名づく。

眞如の理體より現じたるものと信知するが故に、少分彼の色相莊嚴の事は來もなく去もなく分齊を離る。唯心に依つて現じて眞如を離れず。然れども此の菩薩猶自ら分別して未だ法身の位に入らざるを以ての故に、若し淨心を得れば見る處微妙にして其の用も轉た勝れたり。

如來の靈體に作智の性能ありて衆生の所見に隨ひて、種々微妙の色相莊嚴を施作す。然れども自然無作にして變化するを作智の妙用とす。作智周遍の故に處として淨土ならざるはなし。衆生之を見聞す

ること能はざるは無明に障らるゝ爲なり。觀經大經等に説き給へる淨土莊嚴の相は、無明垢質を離れたる心象に所現したる作智の象相なり。人心眼開きて三昧の窓に所現することは察智に於て説明するが如し。人心垢を脱する時は常恒に淨土に在つて清淨莊嚴が毀たず失せずして見聞することを得ん。

先に説きたる如く作智は任運無作の如來の作用なり。故に淨土の一切の莊嚴は自然無作の作智の顯現なり。經に其の相を示して、

觀經に、阿彌陀佛身無量邊、是凡夫心力の及ぶ所に非ず。阿彌陀佛神通如意にして十方國に於て變現自在にして、或は大身を現すれば虛空中に滿ち、或は小身を現すれば丈六八尺なりと。また大經に、依報の如來作智自然變作の相を説いて、

其の國土自然の七寶合成して地と爲る。恢廓曠蕩にして限極すべからず。又自然の伎樂ありて法音に非ずと云ふことなし。又七寶宮殿一切莊嚴自然化成なり。又衆聖が寶池に入るに意に水をして足を沒せしめんと欲せば、水即ち足を沒む。等乃至、自然に意に隨ひて神を開き體を悅ばしめ心垢を蕩除し、清明激潔にして淨きこと形なきが如し。又波は自然の妙聲を揚ぐ、但自然快樂の音のみあり故に安樂と名づく。又宮殿衣服飲食衆妙華香莊嚴の具猶し第六天の自然の物の如し。若し食せんと欲せば七寶の盃器自然に前に在り。百味の飲食自然に盈滿す。此の食實に食するものなし。但色を見香を聞

いて意に食せりと以爲へば自然に飽足す。身心柔軟にして味著することなし。事已れば化し去る。復彼の佛の國土清淨安穩にして微妙快樂、無爲泥洹の道に次がり。其の諸の聲聞菩薩天人智慧高明に、神通洞達して咸く同一類にして形異狀なし。但し餘方に因順するが故に天人の名あり。顔貌端正にして世に超えて希有なり。容色微妙にして天に非ず人に非ず。皆自然虛無の身無極の體を受く、と。

淨土五妙境界即ち感覺的の目に其の色を視、耳に其の音を聴き、鼻に其香を嗅ぎ、舌に其の味を嘗め、身に觸るもの、是等は皆如來作智の内外に顯現したるものなり。個々の感覺に作智が顯現し外に五妙の境となり、微妙の心象態に顯現す。個々よりは能感の心と所感の境とは内外に別つ如きの觀あるも、其の實は如來の作智の兩方面に現じたるに外ならず。

一大心靈に屬する作智は自然に不可思議の妙用ありて、摩尼天鼓の思意によらずして自ら事を成ずる如くなり。内外に顯現する作智の妙用を知らずして、人淨土の説相をきゝて天然界の經驗界に等しく、數多の太陽系を超えて彼岸に物質的に存在せりと謂ふは甚だ謬りなり。其の實、作智周遍する故に、衆生無明垢質除きて、作智によりて自己の感性靈化する時、處として清淨國土妙色莊嚴ならざるなきを觀見することを得べし。

淨土とは如來作智の現象にして、衆生作智に靈化せられたるものゝ現はす心象なり。

〈2〉 成所作智

頌に曰く、五塵五識はことごとく、成所作智の作用にて、

自然と心靈の兩界に 淨妙麁穢と現はるれ。

成所作智とは主觀と客觀との感覺作用なり。主觀としては生物の五識の感覺作用にて、客觀としては色聲等の五塵の現象なり。能感の心と所感の境とは本同じく作智にして兩面現なり。

一法界中の一方面を自然界と名づけ、他の方面を心靈界と名づく。自然界は凡夫の所感にして、心靈界は聖者の所照なり。凡夫の所感は麁穢なる五塵にして、聖者の所照は勝妙なる五塵なり。

鏡智は一大觀念態の總相にして、作智は色聲等の別相なり。また主觀の方は、觀念は總にて、感覺は唯外界との關係によりて其の作用を起す。

感覺の本質を論ずるに、實在論者、觀念論者、平行論者あり。實在論者の見解によれば、吾人の感覺は客觀の事物即ち色聲等の實性を吾人が實に感覺すと。感覺は物理的と精神的との二要素を含む。

一方は身體と他は精神、即ち或外界の物質刺激を感覺神經の末梢に受けて、之を腦に傳へ、精神の反

動として起す心理作用、即ち物質の分子運動が吾人の官能を刺戟し、精神が之を受けて一の感覺をなす。極端なる物理學者の如きは、勢力變化の理を感覺と其刺戟との關係に應用し、心の働き凡て神經に外ならずと。例へば音響の分子運動が鼓膜に達して、其勢力が神經の力となりて腦に傳はりて感覺生ずと。故に感覺は物力の變態に外ならずと。恚る唯物論者は決して相待的關係の解釋をすることを得ず。物理的運動の原因が心理的感覺の結果を生ずとは奇ならずや、殊に況や宗教は生理的の感覺即ち肉眼等に限らず、心眼等をもて感覺を説明せんとするものに至つては、唯物論者の見解は適せざるなり。

次に觀念論者は、客觀界感覺なるものは、物質其物にあらずして、主觀精神の形式を客觀化して、物質の五塵の境と現ず。自己の主觀的形式を離れて物質に感覺あることなし。幻境夢現の如きは物質的實在にあらざれども全く其現象が感覺するにあらずや。

唯物論と唯心論、何れにしても一方に偏するものは全く其當をえず。物心一元論に進みて物心平行論あり。謂く一切の心意過程は之に平行して伴起する物質過程あり。また物質過程には之と伴起する心意過程あり。例せば物質の運動即ち空氣の波動は神經の末端を刺戟し、之を腦に達すれば、此空氣の運動に平行伴起する心意過程に感覺と現はる。普遍的平行論は感覺の根底を發見す。いかにとなれ

ば物心は兩面にして物の裏には必ず心あり。而して此兩面の實在真相を示すものは心にして物質は其外面の現象に過ぎず。内性は心にして外象は物、物心一體。心に寫象と意志あり。心の現象たる物質あれば力の活動あり。内的意志は即ち外界に物の運動になり、動力は即ち意志なり。例へば太陽の力によりて、地球に分子運動を起し光と熱となり、引力によりて重力固形體となる如き、すべて物力なるものは内性の意志なりと云へり。意志的運動によりて客觀的觀念即ち物象なれば、力の分子運動即ち客觀の感覺なり。能感覺の心と所感覺の五塵とは、一體の兩面的現象、すべて之を作智の作用とす。

吾人の感覺は唯自然現象界に對してのみ之を見聞す。然れども是作智の全體にあらずして唯一面に過ぎず。

物質の分子運動あれば、必ずこれを五官に對して感覺をなさしむ。分子運動は極めて微細なるものに至つては、吾人の見聞の及ばざる處、たとへば分子なるものは人の見ること能はず。鐵の中にありてアトムは不斷に運動す。極微分子相觸るために音聲を發すれども吾人はこれを聽くこと能はざるが如し。

作智の妙用は實にこの自然界に於て、いかなる處に於ても行はれつゝあれども、吾人の官能は塵に

して普くこれを感じする能はず。

此器械的の肉の感覺を超えて天眼等の五官をもつてせば、自然界に行はれつゝある作智の妙用は一層深遠なりとす。然れども肉眼と天眼等の感能は自然界の現象に對して、龜と妙なるの別あるのみにして、未だ猶一層高等なる微妙なる心靈界に於ける作智の妙用を證する能はず。

法界は本一體にして相たる智用の方面より窺ふ時は重々無盡に感覺の相が行はれつゝあり。若し心眼開發する時は心靈界に勝妙五塵の境界あり。一法界は本より娑婆に即して寂光土、穢土と處異なるにあらず。作智は自然界に常恒に行はれつゝある如く心靈界にも行はる。一法界中に在つて各其機能に隨つて感覺を異にす。譬へば青眼鏡をもて向ふ時は物として青色ならざるはなきが如く、吾人が此器械的の肉眼をもて、世界は實に是の如しと感ず。吾人人類の外にいかん法界を感覺しつゝあるやは、吾人の經驗すべからざる處。然れども若し心眼を開くときは、靈界微塵の五塵を實驗することをうべし。唯識論に一水四見の喩をもて斯理を證す。一水四見の譬とは、吾人人類が水と感ずる物は、水族即ち魚類等には空氣の如くに見え、若し餓鬼道の衆生の爲めには熱河に感じて、天人の爲には瑠璃寶地と認むとの例の如く、一實法界中の作智の妙用種々に變易する。プラトールが常人の覺めたる所は賢人の夜にて、賢人が闇黒と見る方を常人は明りと謂へり。肉眼をもて自然界を経験するの外に、こゝ

に在て靈界を實驗すること能はざる人の爲には、美天國を超然たる彼岸かまたは十萬億土の西方に在りとす。若し心眼開きし人の爲には阿彌陀佛國去此不遠と説く。（良忠上人の意）

釋迦佛陀は肉眼を以ては吾人と同じく娑婆界を見る。同じく此土に在つて佛眼をもつては寂光淨土微妙の莊嚴の相を知見し給ふ。されば法華經に、我は三界の如くに三界を見ず、如實に三界の相を知見すと。

心靈界の方面に於いて、法眼をもつては、十方法界一切處の微妙の五塵清淨國土、是諸の三賢已上七地已下の菩薩の所見。宇宙を盡して一心法界無相圓明の眞空界、一切の勝妙の五塵をも超絶せるは、八地空位の菩薩の所見。空有雙べ照し、一眞法界に在つて無盡の莊嚴を知見し、一塵に無量の佛刹を見、重々無盡に互映して窮りなき能感と及び所感なるは即ち佛眼なり。佛界を遠き彼岸に求むべからず、佛眼開く處に顯はれん。

自然界の客觀の五塵と、主觀の感覺と、また心靈界に行はるゝ物心の感覺とは、共に作智の異方面現象なり。

宗教は終局は心靈界の佛眼佛土を得るを目的とす。

肉 眼

頌に云く、成所作智の妙用は 自然界に行はれ

肉と天との五官にて 鹿妙の五塵感ずなれ

自然界の現象たる一切の客觀界なる感覺、即ち青黃等の色塵、宮商等の聲塵、香臭の塵、甘苦の味塵、冷煖の觸塵等はすべて客觀的物質の分子運動の現象なり。客觀にこの分子運動あるも、若し主觀の五官的機能なからんか、すべての感覺の象あることなし。この能感と所感とは同じく作智の兩現象なりとは已に論じたりき。

自然界に於ける主觀の感覺に二種あり。肉的五根と及び天的五根なり。肉的五根とは即ち眼耳鼻舌身の感覺作用なり。また次に天眼天耳等是なり。

今吾人が肉的五根につきて自然界の現象を説明せんに、先づ暫く吾人が本能に具備せる五官をもつてする、物質の五塵の分子の刺戟によりて伴起する視聽等の感覺は、いかなる關係によるやと云ふに、肉は生理的器械的にして、外界の色塵的極微の分子が眼に刺戟し、神經纖維によりて中樞に傳達し、之に平行せる心意過程に於て心理作用を伴起し、こゝに於て視覺生ず。客觀的感性は物理的エー

テルの媒介により、彈力の振動電氣等の壓迫より振動する分子運動の刺激より伴起す。

物理器械的なるを以て、若し同一の生理機能に同一の刺激を與ふる時は、同一の感覺を生ずべし。然れども生理的官能は生物發達の程度に隨つて、必ずしも同一なりと云ふべからず。最下等の生物に至つては感覺作用の鈍きことは勿論なり。

吾人の肉眼等は生理的機能なるを以て、全く生理的に便利の方に作用成せり。この生理的に着色拗振せられたる感覺なれば、吾人は自己の感覺をもて自然界に對して實相を感ずと謂へり。蓋し未だ已上の感能開發せざる爲のみ。吾人が現在の感覺の主觀と客觀とは一分に過ぎず。

天眼等の五官によりて

吾人は肉眼等の五官をもつて、自然界中に行はれつゝある作智の用を知れり。

次にまた天眼等をもつては自然界に行はるべき感覺作用によりて作智の一大用を證せん。天眼等の五官として主觀と客觀とに現ずる用は肉眼の如く器械的ならず。天眼的感覺は自己の精神と天然即ち自然と一致する時に神通感應して、自然界中の遠隔の地にある事物を見聞することを得。本來斯の如き感覺的作用は自然界中に存在する作智の妙用に存すれども、個人感應が之と相應せざるが故にこの

作用なきなり。

催眠の心力感應の如きは術者が、被術者をして幻覺によりて他郷の事を見聞せしむる如き、また熱火を冷涼と感ぜしめ、人格を更換し、種々の感覺作用をなさしむる如きは、物理學的のみにては解し難きなり。精神共通し感應によりてこの作用あり。

佛教の天眼天耳は居ながらにして千里の地を見聞し、他心通は他人の心事を能く讀みうる。是らの理はいかにして此と彼と感應するやとならば、個々物質的には別々なれども其形而上の理に於ては同じく一大精神界中の個々にして、作智の妙用によりてこれを可能とす。

吾人が生まれたるまゝの心意は自然に規定せられたる生理の本能的に感覺しうる外に見聞の用をなす能はず。若し精神修行の結果で、作智の用が生得已上に達する時は自然を使用す。本能の感覺は自然に使用せらる。自然を使用するが故に意に随つて、自然界の事物を生理機能の肉眼に藉らずして見ることを得。それと同じ例は實行の理性の道德意志も、天然素朴の人は自然と因縁に規定せられて、性癖や習慣の爲に意志の自由を得ず。然るに道德的意志が發達する時は、意志自由となりて、自我が自己の氣質にも習慣にもうち勝つて己を制することをうる如し。

認識にも自然の規定の許さざる物存在を、自ら見んと欲せば見ることをう。精神發達の結果は自然の

規定を超えて自由なる感覺を成しう。天然素朴の人は自然に産出せられたる嬰兒にして、認識にても實行にしても未だ自由を得ざるなり。

進みて天眼を體達したる人は、自然を規定せる天則の理性と自己の心性とは同一なれば、自己の作智は即ち自然界の作智なれば、意に隨つて自然界の事物を見聞することやう。

佛在世のアラカン及び神通を得たる人の五識が、よく通達せること肉眼の及ばざる處、是本より作智の妙用が自然界に行はるゝことは、彼此の感應作用が感覺となり、また能感覺の作用は行はれあるも肉器械が之を感覺し能はざるのみ。最も精明なる望遠鏡は肉眼の一千萬倍の距離を望みうると。若し其鏡よりも萬億倍の度なる鏡なしと云ひうべけんや。自然界に自然律として行はれある作智の作用は、宇宙を盡して一切の萬物が相互に感應し、乃至重々無盡に感應すべき理は本來有すれども、吾人が肉眼の器械は拙劣にしてこの關係を明瞭にせざるのみ。作智の妙用は無邊なれども吾人の器械が有限なるなり。

天眼等を以てまた望遠鏡などを以ても、一分自然界に行はれつつある作智の用を證明することを得べし。

又天的感覺とは諸の梵天等の境界なり。色界無色界が那邊に存在するやは今の論にあらず。四禪と

四無色定を修する行者が、深禪定に入つて一切の外界の五塵に對する感覺は滅し、四禪の靜慮澄淨として十方洞かにして、有漏禪定の光明普く十方に徧し、自己と天と融合し神心怡樂歡喜自然の妙樂を感じ、色究竟天の如きは經に、群機を究竟し色性の性を究めて無邊際に入る。人間の五塵の分別を離れて五識を去り澄淨なる大虛に同じければなり。無色定とは無色とは前の色究竟定にて一切の五塵の境界は已に空じて亡じ、已にすべて空しく主觀の心のみ。空處天とは、すべての分別の意識がなくなりて、無意識になるを空處と云ひ空と云ふ。識無邊處は幽玄なる禪定の心のみありて宇宙に遍滿し、次に無所有處とは深き禪定心のみにして、龜想の心なき故に無所有處と云ふ。次に非想非々想とは微細なる想念のみにして靜慮心の微妙の極まれる處、即ち是有漏の神識にしては最も幽玄なる神秘的靈の相なり。

是らは靜慮三昧中の所觀の境にして、もろ／＼の凡夫有漏定中の極なり。此神秘的觀念界は自然界の感覺は感ぜざれども定中に自然に微細の感覺に比すべきものあり。これらを天的五識の境と名づく。

頌に曰く、心靈界に作智の用　法慧二眼開くとき

勝妙五塵の靈界と　清淨眞天と顯現す

自然界に自然の理法として感應作用行はれつゝあるうち、肉眼は生理的機能、器械的にして感覺作用狹少にして、天眼は自然と一致するが故に無限なることを明せり。次に進んで作智が心靈界に行はるゝことを明さば、

法　眼（法身菩薩の所感）

肉眼は肉身に相應すると同じく、法眼法耳は法身と相應す。これが所感の境界を清淨界と名づくべし。肉眼が自然界に於て極微の分子動を明かに感覺する如く、法眼等は心靈界の妙色莊嚴等の五塵を感覺す。肉眼が自然の子たる如く、法眼は心靈作智の子たり。佛眼等は作智の自己にして全く一致したる處。

一眞法界には自然界と心靈界とは本一體の異現象にして、吾人が目撃する處の自然界は龜藏なれば此を去つて遠き彼岸に清淨國土を求むべからず。法眼開く處に淨土の門は闢けん。微妙の莊嚴は顯はれん。經に、阿彌陀佛去此不遠、淨業成ずるものは觀ることを得んと。人々悉く自修して其の眞理を

認めよ。古聖我を欺かざるを證せん。

心靈界の莊嚴は、自然の感覺界を超えて、超感覺の慧眼と相應せる一心法界に至るときは、超時間超空間超感覺なり。而して其心靈界にまた勝妙なる五塵の靈界顯現す。獨逸のポールゼン曰く、宗教は一たび捨てたる感覺界をまた高遠なる彼こに勝れたる感覺世界を再び立つると。明の智旭師曰く、問て曰く、寂光淨土には理智の光のみにして五塵の相あるなけん。答て曰く、爾らず、若し寂光に勝妙の五塵なくんば、何ぞそれ偏眞に異ならん。

靈界作智の用に法眼等の五識は、作智の全にあらずして分なり。是法身菩薩の境界なればなり。若し如來地に入るときは全く作智を自己として、自ら作智の能所一致して自由を得たり。起信論に作智の菩薩に對する相を説いて曰く、眞如の用とは即ち自然に不可思議の業種々の用あり。眞如と同じく一切處に徧す、然れども用相の得べき有ることなし。

慧眼の境としての作智

心靈界が法眼の境としては勝れたる五塵の境界として感覺するなり。進んで慧眼等の對象としての作智の用はいかになれば、前の自然界の物的の感覺を超え、また心靈界の妙感覺を超ゆる時は、非

物質非感覺、直觀的に一體觀の如き感あり。時間空間因果律にしたがつて現ずる處の自然の物質的感覺を超え、また寫象の連續的說話的を超えて、純粹なる形式直觀なるは、一大圓相、十方洞然として虛徹靈通、内に非ず、外に非ず、中間に非ず、一切差別の相を離れ、絕對唯一、智慧の光明、一切の用相を離れたる自性天眞。

慧眼には能感所感なく、本來一體、自己の直觀同一智慧の故に對象の現すべきなし。

慧眼によりて一大心靈界眞境現前する時、一切の感覺泯絶し、擾々たる萬物紛紜たる塵累は夢幻泡露の戲論絶えて、一切の約束を脱し、絕對無規の新天地を發見せり。

慧眼は無碍にして肉眼所對の萬象を通じて罣礙なし。擾々たる萬物は慧眼を障る能はず。吾人慧眼を以て實相を觀ずる時は一眞法界顯然たり。法界一切の山河大地より乃至塵數の國土天體に羅列せるも、生滅轉變の物は悉く一眞法界の片影に過ぎぬ。凡夫の夜とする處は聖人の晝たり。慧眼によりて一心法界の本質を直觀す。

諸の聲聞緣覺の二乗が涅槃地と固執せる偏眞の空理は慧眼の消極的方面なり。淨心を得たる菩薩の所見は微妙にして轉勝れたりと。業識てふ分を離れては能見の心と所見の境と一致して見相なし。諸佛の慧は此彼の相を超えて相見ることなし。

一法界の中に於て一分たりとも自我分別あるが故に此に對して彼を見る。この相待を離るゝが故に絶對無礙なり。

信論に、若し見を超さば則ち不見の相あり。心性見を離るれば卽是徧照法界の義。
見不見の相待を絶し心靈と一致する時は法界徧照なり。

佛眼

頌曰く、作智の妙用不思議にて 一塵無量の土を現じ

重々無盡の感覺は 佛眼ありて相應す

如來作智の妙用は自然界にも心靈界にも、所能の感覺作用として映現したるも、肉と天眼とは自然界に、法と慧とは心靈界に。然れども未だ全く本然の作智と全然一致したるにはあらず。唯其分に應じて作用をなす。佛眼のみひとり法佛自然の作智と全然一致したる處。

佛眼は慧眼と法眼とを統一し雙照す。故に佛眼開く時は常寂光土の大慧光明界中に衆寶莊嚴の事相を現す。

如來の大智慧は無邊にして法界に周遍すると共に、無盡の微妙なる五塵の勝妙莊嚴を現じ、而して

諸の菩薩の法眼は如來作智にて現したるものを能感覺す。佛眼は作智と全く一致したるものなれば、自ら境界を示現して自ら感覺す。諸の菩薩の法眼は報身如來が他に受用せしむる處の相を感覺するのみ。佛眼は自受用にて自ら現じ自ら感ず。能感と所感と自己とにあり。

無盡の妙用。

佛眼は法慧二眼を統一し雙照するが故に一塵の中に十方無量の世界を現じ、而してこれを見る。一塵爾るが如く一切塵にまた一切佛土を見る。經に、於一微塵中、各示那由陀無數諸佛、於中說法、等。又云く一微塵所示現、一切微塵亦如是、等。

五根互用。圓融無碍。

五根互用とは、華嚴に如來の五根は大小無碍、一々の根が皆法界に徧して、また見聞の性を壞せずして、而も相混雜せずして諸根の用をなす。

互用無碍。

六根互に相用ゐて礙げず、即ち眼根を以て見聞嗅味等の識を起し、身を使用して無碍なり。また應機無碍にして自在の身、十方一切衆生の爲に齊しく應じ、多くの機類が一時一念に感ずるも、身また分たずして普く現ず。此に在つて彼に現ずることを碍たげず。

十方法界一々塵に十方依正を現ずると共に、これを感じ、一切萬物の中に五塵を現す。悉く作智の妙用なり。

依正互融。

密經に曰く、佛身不思議國土悉く中に在り。又一毛に多刹海を示現す。一一毛現ずること悉く亦是の如し。普く法界に同じ。又一毛孔内に難思の刹一切國土所有の塵、一一塵中佛皆入。今此らの文によりて明に知んぬ、佛身及衆生身、大小重々、或は虛空法界を以て身量と爲し、乃至一切大小の身土、互に内外となり、互に依正と爲る故に依正互具とす。

如來の五根と及び所感の五塵とは如來作智の作用にして、能感の五識と所感の五塵と一體の兩面現なれば、能所の異あることなし。如來は依報の萬物の中に如來眼ありて正報を見る、乃ち色心不二なり。華嚴に曰く、法界一切萬物の中に、自然に佛、中に在して、常恒に說法し、乃至、不思議を示現す。是の如き說法と不思議の業用とは、如來唯自ら之を見聞し給ふのみ。甚深微妙の五塵は如來自ら之を發して自ら之を受用し給ふのみ。之を自受用の法樂と云ふ。

三世常恒自然法爾の作用は唯佛與佛の境界、如來成所作智の作用なり。之を佛の五根に對する五塵の境とし、作智の全部とす。

自然界靈界本一體の兩面とは已に説きぬ。尙重ねて密教によりて之を記さば、此二界を彼には法爾隨縁の二義とす。曰く、法爾とは法佛如來自性の境界、一切の五妙境界は法然の所成、即ち法佛の依正是なり。大日經に大日世尊等至三昧に於て即時に諸佛の國土地平なること掌の如し。五寶間錯し、八功德水芬馥盈滿せり。無量衆鳥鴛鴦鵝鵠和雅の音を出す。時華雜樹敷榮せる間に無量の樂器を列ね自然に韻に諧ひ其聲微妙にして人聞くことを樂ふ所なり。無量の菩薩隨福所感の宮室殿堂意生の座あり。如來信解願力の所生なり。法界幬幟の大蓮華王を出現して、如來法界性身其中に安住せりと。

此文は何の義を明すや。謂く、二義あり。一には法身法爾の身土を明す。謂く法界幬幟の故に。二、隨縁顯現を明す。謂く菩薩隨福所感と及び如來信解願力所生の故に。謂く大日尊とは大ビルシヤナ佛是乃法身如來なり。法身の依正は則法爾所成。故に法然有と云ふ。若し報佛と謂ば亦大日尊故に信解力所生と云ふ。又云ふ、時彼如來一切支分無障礙力十智力信解より生ずる所の無量の形色莊嚴の相は、報佛の身土を明す。若應化佛大日尊と謂はば、應化光明普照法界故此名を得。或は釋迦と名づく。無數劫に六度の功德に資長せらるゝ身、此には應化佛の行願の身土を明す。若しは謂く、等流身を亦大日尊と名く。分に此義あるが故に。經に即時出現と言ふは、此文は等流身の暫現速隱を明す。身已に

有り、土豈無からんや。此は等流身の土を明す。上所説依正の土は並に四種に通ず。

〈3〉 成所作智

感覺的作用の原理

如來作智とは絶對寫象に屬せる智態にして、一切の主觀の感官作用となり、また一面には客觀界の色聲香味觸等となりて、感覺せらるゝ物象との兩面となるべき一大寫象態なり。之を成所作智と名づく。

吾人に視聽等の官能ありて、能く對象となるべき日月の光り山河大地を視、また音樂及び人の言語等を聽く等、感能と共に感覺せらるゝ客觀の物象等は、宇宙造化に如何なる性能よりはの作用を賦せらるゝと言ふに、藏性に成所作智の性ありて、天則理性により、すべての自然界と生物の生理機能との相待的關係作用に此の作用を起こさしむものとす。

宇宙にかゝる物心二象の感覺作用をなさしむものは如來藏性に屬す。作智の作用とするも此にまた二面あり。

甲は天則理性の自然律に制せらるゝ生理機能による感覺作用なり。

乙は歸趣の理性。心靈が開發して心靈界に對する靈的感覚と心象との感覺作用なり。

甲は吾人の生得の五官の作用によりて、見聞する經驗世界の感覺なり。

乙は宗教規定により心靈開發し、心眼心耳等によりて見聞すべき靈界の顯現なり。

天則の理性による感官機能と、歸趣の理性によつての靈的感覚作用とは、其作用に於ては凡聖相ひ同じからず、雲泥の差ありと雖も、其は衆生精神の成不成によるのみにして、兩方とも如來藏性の一切作智が精蘊の兩機能に顯現するは相ひ同じ。

初めに自然律に支配せらるゝ衆生の感覺を論ぜば、

自然律と生理機能の感覺及び所感の境

能感の主觀の方面のみを六根六識と云ひ客觀を六入と名づく。

六入。生物の感官機能を入と名づくるは、感覺官が客觀の色聲香味觸等の極微の分子を吸入し主觀と客觀との渉入によりて感覺作用を起こすが故に名づく。

此感覺作用に就ては、唯物論者は感覺は唯物理的運動に外ならず、意識も神經の物理的活動なりと

し、また二元論者は物心二元は關係なし、感覺は神經活動に由らずとす。此二説何れも正論にあらず。

生理的機能は神經細胞の變化なくして感覺起ることなし。また感官神經或は腦髓なければ感覺は起るべきにあらず。

唯物論が心の働きは神經に外ならず、光線の波動が網膜に達するや其勢力が神經の力と變じて腦に傳はり、又變化を起こして感覺の作用を起こすとは、其は物理學の勢力變化の理を應用して、腦の變化は尙ほ動力變じて熱となるとの理論と同じなれども、其はまた正當に非ず。感覺は物理的運動に非ず、之に刺激を與ふるは物力なるも、之を感じて感覺となりしは精神作用なり。

何れにしても外物と内官との相關によりて感覺を起す。

物的の所感と心の能感とは、本同じく藏性所變と言ふと雖も、相待には物心兩性相ひ同じと言ふべからず。物象の力が内界に刺激しそれを印象した影が感覺なりと云ふべからず。外物の刺激はエーテルの運動にして、内界は之を神經より腦に傳へて精神之が感覺をなす。分子運動は刺激にして感覺に非ず。感覺は全く精神作用なり。物的刺激と心的感覺作用とは相ひ同じからず。

感覺は精神の受容的にして受動のものに非ず。感覺は活動のものなり。然れども之が活動せしめん

には客觀界に資料を要するなり。

更にまた感性の所在を論ぜん。

感覺なるものは主觀にあるか、將た物體にあるかのことは既に論じたり。然るにまた更に之を論ぜんに、客觀界のエーテルなる彈力ある振動により、また電氣及び機械的壓迫が刺激となりて、視神經を傳て視覺を起し、また彈力性として物力が空氣を振動する如く、また其彈力の分子動が發して響動は空氣に傳はり、波動して人の鼓膜を打ち、鼓膜は之を神經により腦に傳ふ。此に於て初めて聽覺となる。然るに音聲の感覺は精神にありて物にあらず、彈力の分子動は物にして客觀觀念なり。此分子なるものと渉入して聽覺をなすもの即ち感能は主觀觀念なり。

彼の嗅覺に於ても一片の梅檀香木を焚く、其香氣分子の瓦斯體が香煙より發して鼻孔の粘膜なる嗅神經を刺激し、腦に達し嗅覺を感ず。香氣は香煙より發する瓦斯的分子なるも全く香氣の嗅覺なるは主觀にあり。人の精神感性なからんか香氣嗅覺あることなし。嗅覺は主觀に在つて物にあらず。

舌官の分子ありて味覺をなす。電氣及び機械的壓迫の物質分子が舌神經に刺激して甘酸苦辛等の味覺を生ず。味覺は主觀にありて物にあらず。

若し主觀の性能なからんか普ねく世は闇々たる盲目的運動のみならん。故に知るすべての感覺は人

の心理にあることを。而して人の官能を刺激する資料は客觀の物質にあることを。

是の如く人の精神に感覺機能を構造し、視聽及び觸覺等の感覺せしむべき性能を賦したるものは何ぞや。宇宙本體に如來藏性が天則理性に感覺作用せしむべき成所作智の所現なり。

かゝる不思議の作用は天則を外にして能ふべきものにあらず。宇宙天則にかゝる精妙なる機用を起すべき性能を如來藏性の成所作智となす。

客觀界の所感の物象

生物の感覺なるものは、天則の作智態が所現なりとは已に論じぬ。尙ほ其が資料となる宇宙の感覺的物象なるものは、同じく藏性が天則作智によりての所現なる理を陳べん。

客觀觀念態が、絕對意志即ち力によりて發現せられたる世界萬物は、皆悉く活けり。物々活きざるなし。活けるものは活動す。

太陽より發する力が物質分子の運動より光となり、熱となり電氣となり、また機械的壓迫となり、すべての分子運動が相互に刺激して、吾人に感覺的資料となる。藏性の性能活動の力あれば必ず象相あり。太陽の力より發する分子動が人の視に刺激して光明を感じしめ、身體の暖熱皮膚の觸覺に於る、

また溫熱の感覺筋覺等に於ても、物理的機械的なるを離れて、感覺を起すべきものにあらざる勿論なれども、すべて感覺するものは主觀にありて客觀にあらず。

感覺は主觀にありて、之が資料となる萬象は客觀より供給せらる。物の分子と自己の神經と平等なる時は感覺あることなし。故に感覺は反動的刺激の如し。

人が客觀の物の性格を識るものは、物にあらずして主觀にあり。色の視に聲の聽香の嗅及び味に於ても然り。また方圓の狀高低の態に於ても之を識るものは、人の感覺に於て好惡嫌惡の生ずるものは、蓋し生理規定に起因するものならん。

感覺はすべて主觀にありと言ふと雖も、或る唯心論者の如く一切の法は唯觀念のみにして心の外に物あることなしとの偏執にあらず。人の主觀の感覺あるなきに拘らずして、物體は依然として存在せり。然れども物質の性相を感知する人の感覺を離れてあることなし。

若し人の感覺なからんか、色の好醜に於ける西施と醜婦と誰か分かつた。太陽の光熱も感ずるなく雷霆鳴れども音なし。若し一切の感覺性を没し去らんか、世界は色もなき嗅もなき、但分子動と物體動との盲的反動のみにして、皓月も皎々たる光なし。電氣の分子動が人の鼓膜を打ち、神經より腦に傳はりて聽覺と感ぜしむ。梅花より發する香的分子は、鼻孔より嗅神經を経て嗅覺となる。

宇宙間の萬物、若は伏力、若は顯動的に、能力を具へて活動せざるなし。其活動には必ず象あり。地球の中心より地殻に至るまで、力あり象なきはあらず。喩へば鐵の分子の如きは常に鐵の中に在て活動す。アトムは鐵の中に分子動を起す。分子動には音をなすも微細にして、人の聽官之を感ずること能はず。若し鐵を鼓つ時は鏘々と響あり。此の響は分子の刺激より起こすものなり。麝香の如きは一グラム二百萬分の一にして其れより發する分子動が能く人の嗅覺を起こすと。太陽の光線は能力の一態なり。エーテルが媒介者となる。エーテルは重力なく唯彈力を有すと。其振動は一秒間四百五十兆なれば赤色となり、七百八十五兆なれば紫菜色となると云ふが如く、客觀物質界は其物質が運動によりて種々の相を呈す。地球上に色となり音響となり香嗅と甘苦に柔澁等の物體の分子なるものはいくく物質界に屬す。物質悉く皆な活きて動く所以は、物理學者は之を太陽の能力に歸すと云ふ。尙ほ一步進んで思考すれば、太陽は是れ現象界、無限の空間に碁列せる無數億萬の一恆星に過ぎず。かく無限の空間を統一して一理性ありて、此天則秩序によりて支配せらるゝことを否定すべからず。斯く宇宙を統一する藏性が天則に活動せる一面に現はれたる客觀的觀念の物體が、微細の分子動と主觀の官能の關係によりて感覺を起こす。客觀の方面を所感の境となす。

宇宙相待規定の生理機能なる吾人が五官を以て見れば、吾人が感覺は主觀にあり、物象は客觀にありて、甲は無形の精神、乙は有形の物質にして、兩方の相異なることは氷炭相容れざる如くなれども、斯相反對せる二象が、形而上に於て致一なることは已に論じぬ。更に感覺に於ても此兩性象は全く反對にして、全く一致せざるべからざる性能を有す。

若し客觀の物象と主觀の心象と已に平等致一する時は、感官を刺激するに縁なし。喩へば皮膚の外物に觸れて久しくして同化する時は、溫覺を覺せざる如く、相待規定なるものは反對の刺激によつて感覺を感じしむ。心質と物質とは其性能に於て相ひ反せる故に刺激をして明かならしむ。然れども此兩質は其根底に於ては一致せざるべからず。若し全く兩性各別なる時は、互に相關に交感すべき理なからん。然らば物象は視覺を感ずべきなく音聲は聽覺を感ずべきなからん。相互の中に涉入すべき理性のある所以は、全く物心涉入し能感となり所感と現ずべき理性なかるべからず。吾人は天則に吾人が能感所感を可能ならしむる一大理性を成所作智と名づく。

宇宙自然現象天體より地上の萬物が悉く活動し、相互の中に物象の分子動となり、一方には生物の

感覺となりて、作用すべき天則に有する理性なり。

楞嚴に、十二處本如來藏妙眞如の性なりと。

十二處とは先きに説明したる主觀的の六識、即ち感官機能と、また客觀に於ける色聲香味觸等と現すべき物質となり。兩方共本如來藏性の所現なりと。若し少しく委しく言へば、藏性に能感となるべき性と所感となるべき物質分子象と云ふべき性を有すと云ふ義なり。

自然界現象。天體無數の星辰より地上の萬類無量の動作、無數の象相、無數恆星中の一たる太陽が、幾億百年を盡して呈する熱の象相、大海の白波をあらはし怒濤を響かしめ、陸上には乃至野に咲く花も色香を呈す。悉く藏性所現の象なり。

已に藏性が自然界に現じたる成所作智の概略を論じぬ。自然界は藏性所現の或る一方面たるに過ぎず、而して人の感官は生理的規定に制限せられ、藏性の眞面目を觀すべき機能に非ず。

根底一致なるを證するに非ずや。然り而して根底致一の理は暫く措きて、相待規定に於て客觀の物質分子動は、主觀の感覺の資料なるに非ずや。若し資料の之に供するなくば主觀の感覺何に縁つて起こすことを得ん。

たとへ物質の刺激いかに激しくも、人の精神なき時は感覺何れにかあらん。此兩性が交渉する共通

の性なかるべからず。

物質分子が相渉入するにエーテルの媒介を要する如き、エーテルてふものは物質として視聽觸を以て認むべきものにあらざるも、是れなかるべからず。蓋だ人の精神のみ此エーテルを認むる如く、精神が此エーテルに對する觀念は、物質極微の分子と精神の中間に位すものと假定するを得べし。

吾人が清霄九蒼を瞻仰するに、幾億萬由旬の距離を有するやを測るべからざる星辰を見る。彼の物色の光、吾が眼瞳を刺すや、我の精神彼所に涉るや、彼我渉入し、物心交渉して、此物心渉入の中に於て、即ち此の空間に於て彼我渉入の媒介者はエーテルならん。此のエーテルなるものゝ其の根を究めば、宇宙の天則を統一する理性の如來藏性にあり。

心靈界に顯はるゝ成所作智

天則理性に依り一切作智より造化せられたる自然界の生類は、自然規定の生理的生活を以て目的とする非ず。進んで心靈開發して心靈界に、心靈界的生活をなすべき手段なりとす。然れば成所作智は心靈界には如何なる靈界と、心靈とに於て靈的感覺を現すべきやを究めんとするは、宗教が成所作智を講ずる旨とする所なり。

心靈の開發せる感性は如何なる狀態となるやは、心理論に於て説明すべきなり。また如何なる修養を要すべきかは、修行分に於て講ずる事にして、今は如來の成所作智は如何にして靈界に感覺的靈象を現すべきやを究めざるべからず。諸の賢聖に五眼具足すとの中に就て、肉眼とは生理的機能の官能なり。他は心眼にして天眼、法眼、慧眼及び佛眼とす。

五眼は人の機能精神にして五種とすべきも、之が本源たる作智態に異りあるに非ず。

肉眼に就ても生類進化の階級たる人類より以下の動物には、同じ世界に住しても、天體及びすべての萬物に達しての感覺人類と同じからざることは、比論によりて推すことを得。

天眼等の感覺は生理的の感覺に非ず。即ち自己の精神と宇宙とは同じく根底たる實體に於て同一の理性なり。此の宇宙心に依て冥合すべき一切物々には、共通すべき理性なかるべからず。また一切の個々は互に感應神通すべき理性によりて連絡するが故に、遠隔の距離にも、天則の理系によりて、通ずるを得るを天眼と云ふ。如來藏成所作智によりて統一せらるゝ感覺性を有するが故に此の作用をなす。宇宙は物質にして精神なり。故に此の天眼耳等の神通作用は本來宇宙に理性を具備するも、衆生は修行によらざれば此の神通作用を起すこと能はざるなり。

聖者の得べき法眼法耳は自然規定の感覺を超えて、宇宙心靈界の如來藏性に包含せる事々物々を照

見する心靈感覺なり。

喩へば心眼にて十法界十如等の三千の事法界を、炳然として現前するが如き、また自然現象界の色聲味觸の事法界を、觀念的心眼にて觀照するが如き、人の心靈が宇宙萬象の物象心象に種々無量の性相差別あるは、十界三千の如き之が差別の理、人の心靈は之を觀じて明了となす。

また觀經に、七寶莊嚴淨土の依報の寶地寶樹寶樓閣等、また如來の眞金色相好光明等の相と、五妙境界の靈象を、一々に觀見するは是れ法眼法耳等と名づく。

次に慧眼とは理法界を觀ずる心作用にして、宇宙理法界の方面を觀ず。吾人が瞑目冥想して一切の感覺的と抽象的との概念を泯じて、盡十方一大觀念態のみなるを觀ず。若しは自然界若しは心靈界は無二無別、絕對觀念體なり、是を慧眼と云ふ。

佛眼とは如來藏性自性と無二無別にして、本覺如來が個人心靈に如實に圓滿に顯示したるものなり。全法界を盡して即ち自性、徧時間徧空間を盡して即ち一微塵中に顯現す。事々物々の歷然たる、一眞法界の理性體と、雙觀雙照して無碍なり。之を佛眼と云ふ。

斯の如く法眼乃至佛眼等の感覺的靈象は心象にして、物象にあらず。故に自然界に發見すべきものに非ず。然るに人自然規定を超越して心靈開發する時は、之を自ら證することを得。

かゝる理性は人が修行によりて顯示するものとするも、もと本來宇宙天則理性の中にかゝる理性は具備せるものなるも、自然的生得の心機には自ら之を識ること能はざるのみ。

宇宙全體如來身なり。法身智身、靈體本然十方處として如來の靈的感覺態ならざる所なし。

心靈に顯現する能感の心も所感の靈象も、本如來藏性妙眞如性が靈界に顯現したるに外ならず。

客體に顯現する如來作智態

如來の作智法界に周徧し、自然界と靈界と別あることなし。其差別を見るは衆生自ら之を見るのみ。

作智本然として周徧し種々の作用を施す。起信論に、

眞如の用とは、自然に不可思議の業、種々の用ありて、眞如と等しく一切處に徧す。然れども用相の得べき有ることなし。何となれば如來は唯是法身智相の身第一義諦にして世諦の境界あることなし。故に作意の施作を離る。但衆生の見聞に益を得しむるに隨ての故に説いて用とす。此用に二種あり。一に凡夫の爲めに應身を現す。凡夫は此應身を見て是心作用の所現と識らずして全く外より來るものと認めて單に色相のみを見る。是の身相は本と如來智態の所現なりと意識せざるなり。

二に菩薩の所見を報身となす。身に無量の色あり。色に無量の相あり。相に無量の好あり。所住の依果に亦た無量種々の莊嚴ありて、示現する所に隨て即ち邊あることなし。窮盡すべからず。分齊の相を離れ、其所應に隨つて常に能く住持して散ぜず失せず。

復次に凡夫の見る所は但だ其の麁色なるのみならず、六道共に各々其の見る所の相同じからず。種の異類と現じて受樂の相にあらず。故に應身と名づく。

菩薩は此の色相は眞如の智相より現じたるものと信知するが故に、少分は彼の色相莊嚴の事は來もなく、去もなく、分齊を離る。唯心に依て現じて眞如を離れず。然れ共此の菩薩は猶ほ自ら分別して、未だ法身の位に入らざるを以ての故に、彼此の相を見る。若し淨心得れば、見る所微妙にして其用も轉た勝れたり。自他分別を離れて、究竟して彼此の相なく、唯一の法身となる。

宇宙全體如來の法身智相にして、成所作智の周徧せざるはなし。衆生が自然界を感覺す。自然界と觀念界は超然として別なるに非ず。然れども凡夫は自然界に現ずる色相は感覺する事を得れども、靈界に常住の妙色莊嚴の相を觀ずること能はず。

宇宙全體如來法身、此を去て彼に求むべからず。法華に、我此土は安穩、天人常充滿、苑林諸堂閣種々寶莊嚴、と。如來の全體清淨國中に在て衆生は自然界のみを感ず。

宇宙を盡して如來作智能なり。一切處として七寶莊嚴ならざるなし。靈眼開くる時清淨國土忽ち現前すべし。法身智相は鏡の如く、報應化佛は影の如く、其の對する人の爲めに現ず。

精神と物質

内界の精神と外界の物質とは、同本質の兩方現象にして、外界の物象なるものは意志即ち力に實現せられたる客觀觀念にして、內的は其の主觀なり。而して外界感覺の物象と現ずるものは客觀意志の力に發動せらるゝ分子なり。

分子運動は即ち力に發現せらるる客觀觀念なり。

本體の二元論者は、物と心とは本來特別なる元素なり。二元論が尙一元論に進みて、心に感覺知覺あれば、身體に感覺の刺激あり。兩者は根本に於て同一、兩者は絶對的に異なるものに非ず、一體の兩面のみ。外面は物質、内面は心。此理は人のみに拘はらず萬有に遍せり。之を平行論と云ふ。其平行論は兩面の内（ ）に重きを見て之を根元實在とし、本質を同うする絶對心靈なりとす。

吾人の感覺も所感の物界も同一本質の兩面なれども、物質の感覺なるものは意志即ち力によりて實

現せられたる客觀觀念の分子運動を、極微の分子として所感覺と現す。

感覺の元素を説明するに、唯物論は、心の働きは凡そ神經の作用にて、例せば光線の波動が鼓膜に達し、其勢力が神經の力と變じ腦に傳はりて、又變化を生じ、即ち是感覺に變ずるなりとし、其物理學の勢力變化の理を應用せしなるも、感覺を物力の變成とするは非なり。感覺は外物の刺激に應じ、能感覺の心質と、所感覺の物質分子動の色聲等と、全く本質にして異らば、いかんぞ感覺の用を可能にすべきぞ。しかれども若し現象にして反對せる兩面にあらざれば、また感覺の對象となるべからず。

感覺の對象たる物象は、本質は客觀意志としての力による分子。分子なるものは意志の力によりて現はれたるなり。

鏡智との分別

鏡智とは同一の一大觀念態なるも、彼は總相にして、此は特殊的、彼は總相にして、此は分子動の差別の相なり。彼は認識の境界を名づけ、主觀客觀の總體なるも、此には客觀には色聲香味觸等の塵境とし、主觀には視聽嗅味觸等との感覺性とす。

凡そ宇宙間エーテルの有る處に遍動意志遍せざるなく、意志の存する處觀念態の實在せざるなし。感覺の五塵の極微は即ち地水火風空大一切に周徧す。此五大とは寫象と意志の二性能に外ならず。或は熱の分子となり、また水等の種々無量の分子となる。之れに相あるものは一大觀念の客觀觀念にして重力固形電氣等の物理學的作用は意志の力なり。

此兩屬性の動力によりて、重力とも固形態とも熱とも顯はる。此兩屬性が地水火風空大の諸象とも乃至數多の元素となり、此極微分子の運動によりて所感覺の體となる。

熱の分子、水の分子、鐵の分子は常に鐵の中に在てアトムは運動せり。また太陽よりの力によりて運動の光線となり熱となる。

分子運動が人の官能に刺激して、色となり聲と感ずるも、精神意志の運動によりて同内面の運動を伴起して感覺を生ず。外界の運動の度量と感覺の強弱とは平行す。動力甚しく力も大なる時は感覺隨つて大なり。また僅少の運動には鐵の中にアトムが分子運動する如きは、吾人の聽覺には感ずることなし。佗の感覺に於てまた然り。

吾人が感覺の本體は宇宙全一の心靈によりて統一せられたる、一切個々の心理機能によりて、之を感覺の作用をなす。即ち理法界中の事々物々なれば、共通の精神によりて相互の感應によりて感覺は生ぜしむ。若し此物質も一大精神の客觀現象にして吾人の心理と根底に於て同一の質なることを許さざれば、吾人の感覺の形而上の理は説明すること能はず。

感覺の根底本質は一大心靈なれば、宇宙一貫して彼此の分別なきも、生理的機制の吾人の感性には物理的器械的の官能によりて、感覺作用をなすものなれば、自然律に支配せられ因果律に規定せられて、其制裁を免るゝこと能はず。故に眼の視覺耳の聽覺に於ても、其の生理的物理的の器械的に活動す。吾人の生理機能の感官は器械的なるも、其根底は全一の心靈に統一せらるゝは疑ふべからず。

一大觀念の意志運動より起る作智の中に於て、吾人は之が機制的なるを以て之を感覺機能とす。然れども吾人の感覺と所感の五塵とは、如來作智の分子たることは拒むべからず。

如來作智の廣大無限の大用を、吾人は微細器械を以て使用し、而して宇宙は本來全く吾人が感覺するものと妄斷す。吾人の感覺は生理的器械的なり。故に宇宙に遍在せる如來作智の如來の境界を覺せんには、五種の感覺的狀態を以て證明せざるべからず。

五種の感性 五眼

一、肉眼等 生理機能、物理器械的。

二、天眼等 自己の精神自然精神と冥合し、肉眼等によらずして。

三、慧眼等 自然界の本體たる宇宙本體を直覺する。即ち心靈界の一體觀。

四、法眼等 心靈界の勝妙の五塵を感覺する。

五、佛眼 慧眼と法眼を綜合統一したる、一心法界の中に寂光淨土に無盡の莊嚴を現する如き又

重々無盡の功德眼。

一大心靈の象は觀念態、之が運動は意志にして皆一大心靈體一なり。之を如來藏性と云ふ。この用より地等の七大態と顯現し、七大に變作が百の元素となり分子となる。

これが兩方面に現じて一面は主觀とし、一方は客觀となり、主觀には眼耳鼻舌身の五官の機能となり、佗面は色聲香味觸の塵相と現じ、兩者は同一の根底なり。故に楞嚴經に、地等の七大本皆如來藏よりして、また五蘊も五識も十二入も十八界も、一一皆本如來妙眞如性、皆藏性循業隨緣の用なり。設し如來藏なくば世出世間一切諸法あることなし。

一、肉眼等の五感。

吾人が五識とする處の即ち、視聽嗅味觸等の主觀的感覺性なるものは、生理機能の感官は客觀的器械にして、或點迄は之を自然科學によりて説明すること能ふべし。

吾人が感覺は運動が外界より入り來り生理作用を惹起し、心理作用となり、吾人が音聲を聴くは、外界の電氣及び機械的壓迫より發したる物理的空氣の振動は、吾人の聽神經を刺激し生理的剌激と變じ、神經纖維によりて中樞機官に傳達し、一種の心理作用なる感覺を生ず。

客觀的感覺は、物理的エーテルの媒介により、彈力の振動電氣等器械的壓迫より振動する分子の運動より、色聲香味觸の五塵元素となり、此兩者の關係によりて感覺作用を起す。

物理的の器械的、生理的、心理的の説明は唯表面よりの感覺の作用を説明したるに過ぎず。これの根本的元理は一大心靈の本質が、兩面現象にして本藏性が循環隨縁の發現なり。

吾人感覺は生理的器械的なるを以て、同一の生理機能なれば、客觀に對する現象の感覺も異らず。しかれども生理的機能なる感性は、機制の種類に隨つて必ずしも同一なりと云ふべからず。

吾人が感覺能とまた最下等なる生物との感能同じからず。されば微少なる昆虫が此自然界及び人爲の家屋等に對する感覺及び觀念はいかん。彼等の感覺は決して人と同じ物ならざるべし。

吾人が機制的感覺は物理的に規定されて、フエヒネルが、吾人は地に立て宇宙の表面を見る如くなくれども、其實然らず。吾人の眼界は環の内面に向ふ如し。眼を空間に放てば感ずる空間は限あり。隘き内面的に向ふ故なり。

無限の心靈を根底とする吾人の心靈も、此生理機制によりて制限せらるる故なり。

吾人の經驗せる自然界は自己の生理機能に應現したるものなれば、己が感覺する經驗界のみを以て、宇宙の真相なり是如來作智の全面なりと謂ふ偏見を止めよ。こは只劣等なる器械を以て窺ふのみ。例へば青眼鏡を以て物に對せば萬物悉く青色を呈するが如し。吾人が機能的感性も又然り。尙進んで生理機能の肉の感能より一層自由なる感能は天眼等の感能なり。

天眼等の五感。

本全一に貫通せられたる個々の精神は事々無碍の關係によりて、生理機制を超えて若しは空間若しは時間的に、感能を可能ならしむるものは、天眼天耳陀心宿命等の理法なり。その最幼稚なる催眠術によりて驗するも、肉眼によらず神通感應して遠隔の地に於ける出來事も見聞する等の如き、また五塵の分子は精神的意志の客觀現象なれば、水を以て堅固なる氷なりと闡示せば彼は全く氷の感覺を生ず。冷き鐵を以て熱鐵なりと示せば、忽ちに熱を感じ其皮膚を焼くが如き、山岳に莊觀なる都會を感

覺せしむる等、術者の意志の指令に随つて被術者に種々の塵境を感覺せしむ。人多くは、術者の心力によりて被術者の感能に變現する暫現の感覺と同じく、吾人が經驗せる自然界は一切各自の心的現象なるを知らず。

何にしても、吾人の生理的なる自然の感覺界にしても、また天眼等の感覺界にしても、吾人及び世界の本質は精神にして、これが所變の世界及び五塵なることは、天眼等を以てまた證するに足らん。單に自然の感覺の外無く自然に規定せられたるままの朴素の漢は、自然が産みたる嬰兒にして、規定せられたる以上に感能を超越すること能はず。故に自然の孩兒また自然の奴隸たり。

第二に、天眼等に體達せる人、自然界を規定する天則の理性と自己と本同一本體の兩現象なれば、自己の意志と自然の意志と同一なれば、自然が感覺物力を規定する意力の如くに、自己の意志を以て、自然の物力を或程度まで左右することを得。肉眼等は自然に規定せらるる機制的感能にして、天眼は自然と一致し自然を自由にす。これらは、如來の作智の或一方面の作用に外ならず。進んで宗教意識は如來の本質たる心靈界に洞達して、心靈界に活動する處の作智の妙用と致一せざるべからず。此を三方面に分つ。

慧眼 等。

自然の生理機能と自然界。

吾人が生理の機能は、感覺は環の内面に向ふごとくにして有限なり。慧眼とは肉眼によらずして、直覺的に宇宙の本體に向ふ直覺なり。是如來の本質なり。一大觀念態なり。一大理性態なり。宇宙全體を盡して一體たり。主觀客觀の差別已に亡じ、唯一大智慧の光明あるのみ。元來慧眼は自己の慧と絶對慧と、能所一致し、彼此なく、虛徹靈明、慧光昭々。こは肉の機能によらず、直覺なり。慧眼開くものの宇宙なり。絶對無限、本然自性。覺と所覺と本來一體。是如來の慧體顯現なり。作は本來自然の作なり。是本質自性にして一切の用を離れたる本質なり。次に如來作智の大用を觀覺するは法眼等の用なり。

法眼乃至法身と法塵及び法境。

作智の分たる法眼を開き法身を得て、法界を觀るときは、嚮きに慧眼に直覺せる一大觀念界に、自然に不可思議の微妙なる靈的感覚界顯現す。淨教に説く處の淨土の莊嚴、七寶の宮殿、妙色の寶地、寶樹には華果多く、寶地には八功德水充滿し、眼に妙色を視、耳に奇なる音聲を聴き、妙香皎潔にして、煖光身に觸るる等、法喜禪悅の妙味を感じ、法身清淨にして形なきが如し。

法眼乃至法身の對象とする處は法界なり。清淨法界また心靈界と云ふ。法界微妙の莊嚴は、色に非

ず、非色にあらず、靈的感覺至美の妙（貌）感覺心象なり。是如來大用の現ずる處、成所作智の所作なり。法眼已に開く時は、一切處として法界即ち清淨國土ならざるはなく、美天國のみなり。

作智法界に周遍す。

佛眼乃至佛身。

佛眼とは平等の慧眼と、差別の法眼等を統一し、綜合して雙照する處の心眼なり。

佛眼は本覺如來の成所作智と全然一致し、佛陀は人格を以て如來の應身なれば、佛眼は即ち如來眼また法眼界なり、耳鼻舌身も又然り。

佛眼を以て法界を觀ずれば處として佛界ならざるなし。宇宙本來蓮華藏世界また常寂光土。如來の清淨佛土の中に在つて、衆生は自ら自然界のみを感覺す。衆生の感ずる穢惡の世界に在て、佛陀は佛眼を以て清淨國土と感ず。法界何んぞ異らんや。維摩經に舍利弗疑つて曰く、吾佛世尊の土は何故にかく不淨なるや。吾此土を見るに、丘陵阮坎荊棘砂礫土石等諸の穢惡充滿せりと。梵王舍利弗に謂つて言く、汝かく言ふなかれ。そは汝が只自から穢惡の國土を感ずるのみ、汝が凡眼を捨て佛の慧眼を以て見る時は、必ず清淨土を見むことを得むと。時に佛陀足指を以て地に按くに、即時に三千界若干百千珍寶をもて嚴飾せり。譬へば寶莊嚴佛の無量莊嚴等の如し。時に佛陀舍利弗に告げ給はく、汝

且く此佛土の嚴淨なるを觀るや。舍利弗言く、唯然なり、世尊よ本見ざる所聞かざる處、今佛國土嚴淨にして悉く現ず。佛陀言く、我佛土は常に清きこと斯の如しと。所謂る凡夫の夜とする處は聖人の晝なり。聖人の晝とする所を凡夫は夜とす。

また佛眼は慧眼と法眼とを統一し雙照するのみにあらず、重々無盡の妙用なり。一塵の中に法界を見る、一塵の如く一切塵はまた一切佛土を見る。また佛陀は五眼互用し、依正無碍。佛陀は法界一切を盡して眼とす。また耳とす、また身とす。

五根互用、圓融無碍。

十方法界一々塵一々の○萬物に十方佛土を現じ、如來常に說法するを見ん。重々無盡の蓮華藏界佛身。

また宇宙萬有の中に色聲香味觸の感覺の所現と、また一切主觀の感覺とは、本如來藏の所變。同一の法界の中に於て、衆生は自ら差別を見る。蓋し只生理機制の爲に制せられる故なり。

上に擧げたる肉眼の感覺より乃至佛界の感覺に至るまで、若しは主觀能感覺、若しは客觀五塵の相、悉く如來作智の妙用なり。故に楞嚴に六處十二入十八界、悉く如來藏妙眞如性なりと。

作智の二現象。

宇宙萬有の一切の能感覺と所感覺との作用は如來の作智の所作なりとす。作智は本同一の體なれども、吾人生理機能はそれに相應せる自然界を感覺す。若し心眼をもてするときは、作智の所感なる心靈界の至美なる五感の象を感覺することをうべし。作智を起信論には、不思議業相と名づく。論に不思議業相とは、智淨相に依るを以て、一切勝妙境界を作す。所謂無量功德の相常に斷絶なし。衆生の根に隨ひて自然に相應し、種々に現じて利益を得しむる故に。

義記に謂く、衆生の爲に六根の境界と作るが故にと。實性論に云く、如來の身は虛空の無相なるが如く、諸の勝智者の爲に六根の境界と作つて、微妙の色を示し、妙音聲を出し、佛の戒香を嗅がしめ、佛の妙法味を與へ、三昧の觸を覺せしめ、深妙の法を知らしむ。故に妙境界と名づく。

〈4〉 成所作智

天則秩序に統一的理性の一切作智態

宇宙現象界は客觀觀念が力によりて實現せられたるは已に論じぬ。神の觀念即ち一切智としての世

界を建設するは、觀念が實在を建設と言ふ如くに、一切智とは一切作なり。如何となれば如來の智は一切萬有に含蓄して、萬物造化的觀念が一切を造作すれば、觀念態一切作智態は絕對意志即ち力の爲めに司命者となりて秩序を誤まらざらしむるものなり。

本來一切作智態は、觀念態に天則秩序の理として、宇宙萬有の中に存在して、本來統一的理性なれば、宇宙全體が全一の身體として、萬有即ち自己なれば、萬有に存在す。作智は自己が萬有を造化し萬有の中に自己存在して、而も造化の用を施す。

宇宙萬有はもと同一本體なるが故に、根底に統一せらる。天則秩序の統一的理性なる藏性は、絶大の設備を以て造化の用を施す。現象の天體星辰より地球萬物の起伏隱顯常恒造化の完全なる、此の天則的作智を離れて一切を造化すること能はず。

現象界に天體及び地球の萬物が生滅起伏の相を觀ずるも、實に成所作智の妙用を歎ぜざるべからず。

藏性は、一切作智は、宇宙絶待の力を使役して萬有を造化するに無限の設備を以て萬物を變作す。無限動作力、永久自動自活し、自養と消耗とは共に自己にありて、天則的に永恒に建設的衝合行はれ、永久自動自活して無始無終に窮りなく、空間を盡して造化の用を施す。無限の空間に比すれば一

塵に等しき太陽系の秩序に就いて觀るも遠心力求心力との能く調和をなし、太陽が原動力となりて他の遊星を運動せしめ、地球の運轉に至るまで秩序あり、其時間を過たず。規則の正しき千萬年一貫して誤ることなし。萬物造化の規則を完うすと云ひ、自動自作の妙用と云ひ、盲目的運動とは云ふべからず。

萬有に通じて天則秩序の整然たるを見れば、いかに巧みであり熟練したる機關師がいかに程の注意を用ゐて組織し使用するも、天則的作智の整束たるが如きにあるべからず。

斯かる宇宙萬有に顯はるゝ天則の整然たるを見、萬物造作の妙用を目撃しながら、宇宙の精神に藏性（智）の存在することは焉んぞ夫れ疑を容るべけん。

宇宙唯一の法身の手によりて成立したる萬物なれば、大は天體星宿より小は地球上の萬物に至るまで、如何なる微細なる個體なるも、一大藏性に繋がれたる個々なれば、各自は各小造化なり。天則秩序によりて其分に應じたる造化の知能を與へられたり。其は萬物の根底に於て一大法身に關聯するが故なり。藏性の天則を離れたる人爲としては自己の毫一筋も造る事も能はず。

太陽は宇宙全一の藏性の一分として繋がれたるが故に、自己に賦せられたる限りに於て造化の用をなし、地球も亦た然り。相待規定のものは獨立して其能をなす能はず。地球と太陽との關係を離れて

は、地球の小造化は獨り自ら其用をなすこと能はず。宇宙間天體無數の星宿は、太陽に屬する諸の遊星と關係し、此の恒星はまた他の恒星と關係し、相待的に因縁相互に規定して空間に繋り、因果關係して時間的に相ひ繋りたる萬物は、無限にして一として此の關聯にもれたり離れたりすることなし。この萬物因縁規定なるものは此の因縁を離れては成ずることなきことは、依他起性の萬物が成立する天則なれども、其根底に於て相方共に藏性の理性なければ、單偶合にして成ずるものに非ず。因縁規定をなさしむる原理なかるべからず。此の原理は一切作智態が此の相待規定を結合せしむる原理なりとす。

相待の原因

佛教に因縁所生の法とて相待的萬有は因縁によらずして成ずるもの有ることなしと云はゞ、萬有は因縁にして作智に預かるなしと云ふべからず。相待なるものは本同一の本體より開展せるものなれば、相待相合して本の一體なり。故に相方に因縁規定をなすべき作智の用ありて、因縁規定を結合せしむるなり。因縁によつて作智あるものに非ず。作智が活動の爲めに此の規定を結ばしめたるに外ならず。故に作智が因縁の本因にして因縁に依て作智を起すと云ふべからず。

物質

現象の影像は何に依て顯現するや。

動物と植物とは同一の根底にして、其根本に遡れば全く無分別に歸す。植物も同じく細胞あり。此細胞も亦た動物と區別すること能はざるなり。

生物の原素フロハイオンの如きは生非生と差別すること能はず。

學者の説によれば、太陽より分娩せられたる地球が久しくして漸く冷却したる或る度合に於て、光線の或る状態と電氣の或る状態との因縁力によりて、反動して一種の生物的組織を生じたり。之を元形質と名づく。炭酸水室の化合物にして精密なるものなり。此が生命となるべき物質元素なりと。電氣と光線との物質の分子動が炭酸水室の分子との因縁によりて分子が之に應じて動くを反動と云ふ。此の因縁反動的が相ひ繋て物質が進化して原形質となり細胞となり進んで動物が高等となり人類となるに至りたり。物質が進んで人類となりしが如くなるも物質は客觀觀念態が意志に實現せらるゝ其中に、向上發達して心靈の生活を營むべき人類となるべき伏能が已に潜伏したるなり。此伏藏を開發して、こゝに進化は作智の能なりとす。

萬物は小法身小造化

一切作智は萬物を造化し、此天則を離れて一も造ること能はず。此の天則に繋る限りに於ては、吾人も作智態の一員として、而も小造化なり。宇宙は一大造作なり。個人は此の一局部にして、然も此の作智に繋れる限りに於て、能く作るの力を得るものなり。作智は能く人の身體四支五官を造り、自ら造化し自ら活動し自ら動く。作智よく物を集めて眼を造り、眼となりて能く視、自ら耳を造り、耳となりて耳の作用をなす。身體の中いかなる微細なる處にても造作の到らざる所なし。古人が萬物いかに微細なるも神を宿すこと能はざる程のものはあらじと。萬物は絶對の神の中の一員にして、個々の中に神の在ますなり。故に作智はいかなる所に於ても建設的事業を營まざるなし。

生命造化

客觀觀念態の力によりて現ぜられ、心靈態の潜伏せる物質なれば、物質は生命となる。化學に炭素は最精妙なる分子が能く變化するに柔軟にして且つ彈力あり。此れと酸水窒の三素と共に化合物を造る。之を原形質と云ふ。酸化によりて生活力を生じ、彈撥力は發動の元にしてまた消化疲勞の本な

り。酸化と彈撥の二作用が消化と分殖との作用を起こし、消化作用は營養を攝取し同化して長養し、其長大が或る程度に達すれば一個が分れて二個となり二個が四となる乃至無量となる、之を分殖作用と名づく。生命は之に依て繁殖す。

生命進化説によれば進化に五則あり。一、生物の分殖の爲めに同類競争するを生存努力の理法。二、身體組織の物質が變易の理法。爲めに生物が種々の種類と變ず。三、身體組織が別物の刺激に感應するを應化の理法と云ふ。四、現在より分れ次のものに類似するを形質遺傳法と名づく。五、種類の多き中其の境遇に適するものは繁殖す、之を適者生存の法と云ふ。

此進化説の五則は元形質の二特質より開發したる結果にして、物質的作用に依て生命の進化の理を説明せり。物質に就いての説明は此に止まるべきも、此物質原形質を造化するものは、物質其物の力にあらずして、是は一大心靈が作智によりての造化なることを意識せざれば生命の根底を極むること能はざるべし。生命の益々進化し發達して今日の人類の如き心靈の生活をなすに至るは、原始的生物にも靈性能が伏藏せられしなるべし。かゝる靈性を伏藏せるものなるが故に向上發達して心靈的生命の人類を造りしならん。然れば原始的生命に有する靈能作智また靈妙不測の力あるに非ずや。一々の生命は一大作智の分身として、小造化の力を有して、分殖して空間的に擴張し時間的に遺傳し進化せ

しむ。

微細なる細胞が代々に向上して單細胞、水母形、脊椎、陸棲、哺乳となり、高等動物人類と終に進み來るには、作智は何故に斯く向上進化せしむるやと云ふに、即ち終局目的に歸趣せんが爲めの理性が實現せしにあらずや。

生物進化

生物原始の無核蟲より有核細胞となりて水に生活し、有核となれば核が生命の宿る所にして核以外は生命を保護する外包と云ふべし。此者の分殖するは其核が分かるゝなり。随つて生命が二つとなりて外包を生ず。分殖が屢せらるゝに随つて、核中の生命が、夫よりは原始の生物の生活には、植物と同じく活動が甚だ鈍く、至つて隱動なる故に、自ら養ひ分かれて二個となる。進化の或る程度に於て雌雄の別あるに至つては、原始の一個が二個に分かれたると異なるは、雌雄本同一の生命が進化の目的をなす手段の爲に、一生命が雌雄の二體と分れたるものゝ如し。萬物は隱動陽動の争に依つて活動し變化す。陽動に非ざれば進化すること能はず。隱動に非ざれば養生すること能はず。雄體は精氣を造るとも、陽動には自ら養ふこと能はざるが故に、生命の核を隱動となす。之を養育すべきに適せる雌

體に移して、之を養はしめて、陽なるものは自らは雌の營養を助け、外は陽動にて進化に努力し而してまた隱動の雌體を――。

此の例は太陽と地球との關係に於ても同じかるべし。太陽は陽性にして生命の本なる炭素の精氣を地球の隱動體に送り、地球は酸水素を送つて陽精より受けたる炭素を助けて萬物を生育す。太陽は陽動にして精氣を發し地球は隱動にして萬物を育む。

雌雄は生命進化の職分は、相互に精氣を造ると、外包を造りて之を養ふとの分業を司る。原始の生物が自己一個にして生命を造り自ら養ふに比すれば不便なるが如くなるも、進化の努力の便利上より出でたる進化即ち一切作智の妙用にして、雌雄合體して本一體なるが故に始めて一個の生命を造る。雌雄の心靈に於て半人なるに非ず。生理分殖に於てのみ云ふなり。本より宗教は心靈開發して眞理に歸せしむるが目的にして、生命は之が手段たるに過ぎざるなり。

生命は心靈を開發し活動せしむる手段にして、生命を保護する四支身體の外包肉體はまた生命の手段、生命及び肉體を進化の本に遡りて原始的生物より進化し發達し來りし心靈生活以前の生命及び身體は心靈生活を出すべき手段に過ぎず。

生命は心靈の手段

生命造化の進化が心靈生活をなす人類の如く雌雄の別あり、此の陰陽兩動反對せる兩性となるにも拘らず、生殖作用の自然より互に相愛し親和すべき力を有せるは、外ならず、生命分殖の生理規定せらるゝ理性なり。雄は自ら陽精氣を造化する天職を賦せられたり。雌には外包を造りて之を養育する隱動によりて生殖作用の功を盡す天則に隨ふなり。

天則に隨ふ生命造化は、終局目的に歸趣の理性のための手段たる生殖なりとすれば言を換へて云へば、宗教的人類を養育すべき手段とすれば、生命分殖作用は是の天則に隨ふ職務ありと云ふべし。結婚は神聖ならざるべからず。兩性の配偶は倫理の基と稱すべし。然れども終局目的の心靈的生活の目的を知らず、手段を以て目的となす如きは迷なり顛倒なりと言はざるべからず。

宗教の心靈生活に入り眞理の目的に協力するは、宇宙の最終眞理の目的とすれば、生命及び身體は之が手段なり。身體及び生命に對すれば、植物及び劣等動物は其の人類的生命を扶助する器具にして、地球及び太陽等も亦之を宗教的人類心靈生活を養ふ爲めの器具なり。

世界は圓滿に發達して多數の宗教的人類を發生せしめ養成すべき天職を有し、世界の終局に無數の

宗教的人類を出して、自己も終局解脫の目的に向つて進化しつゝあり。かゝる世界は目的ある手段として天則秩序が萬物を造化し保存するは、是れ宇宙及び一切に作智の妙用なりとす。

一切の百般の工藝技術はすべて個人に現はれたる作智なり。

世界及び人生は天則秩序の理性によりて成るものとすれば、人生は是れ迷妄なりや、將た目的ある方便なりや、との問には、此に二様に答ふことをうべし。人には無明罪惡の脱却せざる素質あり。消極の方面よりは迷妄と業との人生なりとして、この世界も亦厭はざるべからず。されども世界及び衆生は天則の理性によりて靈性を體とし此を開展して終局目的に歸趣する理性あり。無上道に到達すべき方便化土とすれば、積極的にして高等なる目的ある手段としての人生にして、之が一切人類の依止たる世界なれば、世界焉んぞ夫れ迷妄のみならん。然れども世界及び人生にはかゝる最深の目的あることを意識せずして、但だ肉體生活を以て目的となし、世界を依屬すべきものとして、進んで終局の歸趣を求めず心靈開發を成さざるものは迷と云はずして何ぞや。

天則理性なる絶大の設備を以て世界を建設し萬類を進化し心靈開發して終局目的に歸趣せしむべき理性ある世界及び人生なりとすれば、世界は方便化土として廣大なる價值あり。

吾人の目的

宗教的歸依を要求する吾人の理想は、終局目的たる理性ありて、絶對なる客體を要求することは、吾人の理想として實現す。吾人の理想は益々向上進化するに随つて、相對的の生滅變易の世界に於ては満足することをえずして、絶對無限の無規定を認識せん事を希望す。

宇宙の無限なる、地球の如き細なる浮漚は無窮なる宇宙の大海に散布し、其の總體の上に成住壞空の波あり。成ずるものは進化し、進化するものは極に達すれば滅す。増減の限あり。天に現はるゝ彗星の如きは成らんと欲するものにして、太陽は進化増隆に達したるものなり。各々異なるも已に壞したるは空になりてまた成じ、成住壞空の浪は無終にして極りなからん。増劫即ち進化の程度が、此地球と等くして、海陸の別をなし、單細胞生物より進化して人類に達したるものもあらん。

吾人の住める地球は太陽より分かれたる一浮塵なるも、其表面に寄生する生物の生命は、世界の住劫に至りて劣等なる生物より進化して人類に到れり。生物は生住異滅し、生じては滅して、生命相續の波は、生物住してより、進化して人類に至り、生命一體の波はいかに生滅するも、太陽の光と共に消ゆべき運命なるは免れず。人生五十年は實に果敢なきものなり。

吾人は斯る拙き運命を以て、いかに無限に反抗せんと欲するも何ぞ能はん。いかにして解脱を求むべき。

宗教意識が要求する如き、絶対無規定にして、かゝる生滅浮塵の中に、吾人の心靈を照して絶対依屬の地を示す處の光明は即ち大圓鏡智なり。吾人は圓智即ち絶対觀念の一員たる自觀によりて、無限の大觀念と一致す。此の心靈智の光明なかりせば、但に物質なりとせば、實に天に日光なきと同じく、盲目的生物にして、絶対に依止し解脱を求むる如きは、とても斷念の外なきなり。然れども吾人は絶対觀念の一員たる自己の觀念なるが故に、解脱すべき理性終局目的を得べき理想あるが故に、必ず宗教意識の要求する所果して得べきものなり。

其は自ら能く觀ずれば、天則理性の中に已に吾人は絶対觀念に繋れることを示せり。人の瞳は小なるものなれども能く天體無數の星界を容るゝに非ずや。古語に、仰いで清霄雲漢を觀ずればまた眼睛を碍るに足らず眼〇の塵々と。意は雲漢に數限りなき星が塵の如くに吾眼に碍ふるけれども、眼の邪魔になるほどの塵もなしとの義なり。人の腦裏の感元質、元質の微細なる幽玄なる、大は無限の空間を收入して尙ほ容るゝに餘りあり。是れ吾人が觀念の大觀念と交渉すればなり。

吾人の觀念は絶対觀念と一致するが故に自己の觀念も無限なり。所觀の本體無限なれば能觀も亦た

無限なり。

〈5〉 成所作智

感覺の能所

主觀の感性と客觀の物質に現はれて色聲等となる。

如來作智は一切の主觀的の感覺と、また一面に客觀の色聲香味觸等の感覺せらるゝものゝ二面に於て宇宙に一々の感覺となるべき性能存在す。この智相を成所作智と名づく。凡夫の感覺より乃至佛陀の感覺に至るまでの一切の感覺作用は悉く作智の用とす。

作智は大圓智即ち一大觀念態の意志に實現する相を離れて別に體あるにあらず。但圓智は總相にして作智は色聲等の別相なり。即ち主觀的に眼耳鼻舌身の感官と客觀の色聲香味觸の表象を感覺する作用の根本原理なり。

作智の原理を研究せんとせば、已に大圓智の認識の理に於て略して説明せしも、更に感覺の本質を

明さば、古來實在論者と觀念論者の反對せる見解あり。

實在論者の見解によれば、吾人の感性の寫象は、事物即ち客觀に色聲香等の諸性具備し、それを吾人が感覺すと。感覺は物理的精神的の二個の要素を含む。一方は身體と一面は精神なり。即ち或物理的刺激を感覺神經の末梢に受けて之を腦に傳へ精神の反動是なりと。即ち物質の分子運動は吾人の感官を刺戟して、吾人の精神之を受けて一の感覺をなすとし、極端なる物理學者の如きは、勢力變化の理を感覺と其刺戟との關係に應用して、心の働きは凡て神經に外ならず、例へば音響の分子波動が鼓膜に達し其勢力が神經の力と變じ腦に傳はりて感覺なるもの生ずと。故に感覺とは物力の變態に過ぎずと。かゝる唯物論は決して相待の關係を解釋するを得ず。物理的運動の原因が心理的感覺の結果を生ずとは奇怪なる理論に非ずや。

殊に宗教の如き、生理的の感覺即ち肉眼等のみにあらず心眼心耳等を以て感覺の原理を説明せんとするものに至つては、唯物的の見解は適せざるは勿論なり。

次に觀念論者の見解によれば、感覺は物質其ものにあらずして、主觀的精神の形式を客觀化し、物質の感覺として現ず。自己の精神を離れて物質に象相あることなしと。

現象論は實體と現象とに超絶せる說なるが故に今は取らず。今は人の感覺の根底は一大觀念が意志

に實現されたる分子運動と及び之に相應して平行して起こす處の視聽嗅等の感覺なれば、客觀的色聲等の分子的運動の現象と、之を感覺する主觀の二者は、其根底は同一の本體にして、感覺の作用を可能ならしむる作用につきて作智と名づく。

唯物と唯心との極端なるものは何れも一面のみに偏して一方を忘るゝが故に其原理を説明すること能はず。一元論に進みて物心平行論の説によれば、一切の心意過程には必ず之に平行して伴起する物質過程あり。またすべての物質過程には必ずこれに平行して伴起する心意過程あり。例せば物質の運動即ち空氣の波動は神經の末端を刺激し之を腦に傳達すれば此空氣の運動に平行伴起する心意過程に感覺を感ず。

普遍的平行論の外に感覺の根底を發見することにいたるべし。いかにとなれば、物心なる萬有は兩面にして、物なる一面には必ず心あり。心の表面は物にして、此兩面實在の眞相を示すものは心にして、物質は其外面の現象、内性は心にして現象は物、物心一體。心性に寫象と意志とあり。是物質には、力の活動あるゆえん。内的意志は即ち物の運動なり。すべての動力は意志なりと云ふべし。太陽の力によりて分子運動を起こし光線となり熱となり地の引力によりて重力固形體を爲す如き、すべての力は意志なり。意志の運動によりて實現する客觀觀念即ち物象にして、內的觀念即ち人の心意なり。

意志の運動に發するもの、關係によりて現象する分を感覺とす。觀念と意志とは同一の心性、相と用として、物體には物力あると同じく、一體の相用なり。感覺なるものは能と所とは一體の兩方面。分子運動は意志にして、感覺なるは寫象にあり。しかれば感覺するものと客觀の現象とは同一の觀念態なり。

さてこゝに於て同一の觀念態なる主體客觀に、物的によりて客觀的感覺なると直觀的に感ずる現象なると、即ち主觀界の主觀客體としての感覺と、客觀的現象としての感覺の二面あり。宗教の客體の本質は主觀界の對象として感覺界を求む。

主觀客觀の現象には對比せる二面あり。然れども根底にいたれば一體なり。一如の實體より色彩音響形態性質等を以て客觀的現象を形成す。

五 眼

唯識に所謂る表色と觀行成色あり。

宇宙の現象と本質との兩面に於て觀すべき表象に五種の方面より成所作智の妙相を觀ぜん。

一、肉眼。二、天眼。三、慧眼。四、法眼。五、佛眼。

一、肉眼。生理機能。器械的物質分子動の關係。

二、天眼。一大觀念中の共通精神交感神通す。

三、慧眼。宇宙本體を直觀し、彼此一體觀。

四、法眼。心靈界の勝妙の五塵を感覺す。

五、佛眼。前二眼を統一して五根互用。圓融無碍。

若しは主觀界若しは客觀界一切感覺に屬する者は悉く成所作智の作用なり。

一大觀念が意志に實現せらるゝ客觀の分子的現象を五塵と云ふ。即ち色と聲と香と味と觸となり。主觀的感覚を五識と云ふ。視聽嗅舌身識なり。兩者同一根底の現象なる故に、楞嚴に地等の七大と五蘊五識十二入十八界一一皆本如來藏妙眞如性。藏性循業隨緣の現象にしてすべての感覺及所對の境は作智の妙用なり。

肉眼等として現象せる五感

肉眼等は吾人の本能に具備せる五官をもて物質の五塵の分子の刺激によりて伴起する視聽等の主觀的感覚性なり。肉眼の感能は生理的物理的器械的にして外界の物質分子運動が波動を起して一の刺激

が生理作用を惹起し神經纖維によりて中樞に傳達し之に平行せる心意過程に於て心理作用を件起す。こゝに於て感覺を生ず。客觀的感性は物理的エーテルの媒介により彈力の振動電氣等器械的壓迫より振動する分子の運動よりの刺激と之と平行件起す。

物理的器械的の感覺の説明は唯表面よりの説明にて根本的元理は一大心靈本質の兩面的現象にて、所謂藏性循業隨縁の現象なり。

物理的器械的生理的器械的なるを以て同一の生理機能に同一の刺激を與ふる時は必然に同一の感覺を生ずべし。しかれども生理的機能は機制的發達の程度に隨つて必ずしも同一なりと云ふべからず、下等な生物の感能と高等なる人類の感能とは同じからざるべし。

一大觀念が主觀と客觀との兩面に現はるゝ感覺なれども、吾人の肉眼肉耳等は生理機能に着色拗捩せられたる感覺を以て現在實相と謂へり。例へば青眼鏡かけて物に對せば萬物悉く青色を呈すると同じく、吾人が生理機能なる感官は作智の或一面たる感覺と云はざるべからず。尙進んで種々の方面より歸納して宇宙に心靈の作用を論ぜん。

天眼等の五感

天然の即ち生理機能が物理的實在の關係によりての心理の感覺を肉眼肉耳等とし、次にまたそれと異れる感覺現象あり、之を天眼天耳等と云ふ。此れは能く精神鍛鍊の結果として、心意に隨つて自由に自然界中の遠隔せる地の事物を肉眼によらずして知見することやう。之を神通と名づけたり。之は精神が彼此感應心通して知見する處なり。これに類似せる幻通なるものあり。世に催眠術と云ふ此幻通によりて驗するも、術者は被術者に暗示するに千里の彼處の景勢を以てせば、被術者は現に之を幻覺によりて明かに見る。また水を以てこれは氷なりと示せば全く氷なりと感覺を生じ鐵を以てこれは熱鐵なりと示せば、忽ち熱の感覺を生じて皮膚を燒くが如き、幻覺中の種々の感覺の如きも、之を感覺せる被術者に取つては、この幻覺は全く實在なり。現在覺醒者が現在界を見聞すると異なることなし。

是らはいかにして是を可能とせしやとならば、物理的のみにては解釋し能はざるべし。佛教に於て天眼天耳陀心の如き、居ながらにして千里の地を見聞した陀人の心事を如實に讀得る如き、其らの元理は彼と我との個々は現象の上に於ては全く別々なるも、形而上の根底に於ては同一の觀念を以て彼我の觀念とし、一大心性中の個々なれば、彼我交感神通して、この感覺を可能ならしむると云ふ外に解釋なかるべし。

こゝに於て吾人は想ふ。實行理性の道德意志にも天然素朴の人は自然の因果に規定せられたるの外に道德上の意志自由をえず。然るに道德的意志健全に成熟したらんには、意志の自由をうると同じく、認識にも自然の素朴なる人は自然の物在を感覺する外に知覺なく自然に規定する外に自由なきものなり。道德修練によりて道德自由意志をうると云ふべく、精神修練の結果は自然を超えて自由に感覺す。天然素朴なるものは自然に産出したる嬰兒にして自然規定の外に自由をえず。物的實在の外に感覺の境界あることなきのみ。

進みて天眼等に體達する人は自然に規定せる天則の理性と自己の心性とは同一本質なれば、自己の意志と自然の意志と一體。自然界に感覺物を規定する意力の如くに、自己の意力を以て自然と同一の働きをなす。故に或度までは意志の自由を得。

肉眼等によりて物的實在を感覺するは自然に規定せられたる機制的感能、天眼等は自然と一致したる心が自由なる感覺なり。

肉眼はすべての普遍的要用なるもの、之れも本生理機關として發達したるものなれば生理上には缺くべからず。然れども宗教は進みて最高等なる心靈的生活を以て目的とする故に、肉眼の發達は勿論なれども、進んで心眼の範圍を開發して、宇宙の本質なる一大觀念界に感覺心象を發見せざるべから

ず。

一切の感覺は如來作智の用相とす。

宗教より云はゞ肉眼及天眼に對する現象の感覺は方便としては需要あるも、宗教生活の目的としては慧眼等の範圍に入りて絕對依屬の位置と自由の安立處を發見することをのべん。

慧眼によりて證明

天眼によれば、感覺は本一大觀念が意志によりて實現する分子運動と、之に相應する主觀的觀念との感應作用によりて、個人の感覺作用と實現するものなれば、一大觀念中の我と彼なれば、彼此感應して、此に在つて肉眼を用ゐずして彼處の境界を見聞することを得。

次に慧眼とは、自然界の事物の感覺にあらずして、超感覺の宇宙實體本質を直觀し、能觀所觀の關係によりて吾人の觀念と宇宙の本質とは致一なることを證す。

實體は絕對無規定なること。

本質は非物質なること。萬有中に存在して無碍直觀的なること。宗教客體とすべき資格。

宗教は相待規定なる生滅世界を超えて絕對永恒不變の本質を求む。相待なるものは約束に隨つて轉

變ず。然るに慧眼によりて直觀すべき實體は絶對的大觀念態。

時間空間の因果律にしたがつて現ずる處の天然の感覺を超え、また寫象の連續的説話的を超えて、純粹なる形式直觀なるは一大觀念態。十方洞然として虚徹、靈通、非内、非外、非中間、離一切差別、絶對唯一、智慧光明、一切用相を離れたる自性天眞。若し之を精神態一圓相を以て表明せば然らん。

慧眼には能觀と所觀となく、本來一體、自己の直觀同一本性の故に、對象の現すべきなし。故に知る全然本質致一なることを。

絶對無規

慧眼によりて一大觀念に一致し眞境現する時、所對の感覺泯絶し、擾々たる萬物紛々たる塵累は夢幻電影の如く消滅し、戲論の夢さめて、一切の約束を脱して絶對無規の新天地を發見す。

無碍

慧眼によりて得たる一大觀念態は無碍なり。擾々たる萬物は森然たるも、絶對なる一大觀念界に障るものなし。肉眼を以て感ずれば萬象宛然たり。慧眼を以て觀ずれば絶對なり。一大觀念光明徹照して無碍なり。

吾人は慧眼によりて實相を直觀し、これに對して知る、肉眼の映ずる處の生滅轉變の相は、意力に運轉せらるゝ現象の或方面たることを。

古哲が凡夫の夜とする處は、聖人の晝なることを。

慧眼によりて宗教絶對依屬すべき眞體眞正の宇宙を發見せり。吾人の慧眼は全く如來本質なる一大觀念の一分なることを知り、之と聯絡せるものと觀ぜり。こゝに於て畢竟依止の安立地を得たるも、いかに絶對無限なるも一大觀念界にして、豐饒なる内容また微妙至美なる五塵の感覺の存在するなくんば、如來に對する要求として靈的生活の内容を満足すること能はず。

さればとて曾て凡夫の遊ぶ處の夜の世界として捨てたる感覺を以て、宗教意識は之を以て甘受するに足らず。如來はいかなる感覺の狀態を以て、吾人の心靈に快感を與ふべきや。

慧眼に證明すべき作智の相

慧眼は如來の本然の自性を直觀す。能所一體、絶對的直觀の一圓相を以て表明すべし。

是如來の一切の相と用を除きたる一如の本性を直觀したるものとす。

吾人は慧眼を以て宇宙の本質を直觀する時には、時間空間物質的因果的の一切の肉眼的感覺を超え

て直觀する時は、宇宙は絶對無限にして唯全一體一大觀念界のみなるを觀ず。

慧眼を以て直觀する時は肉眼所對の感悉く泯絶す。擾々たる紛々たる萬物は夢幻泡露の如し。吾人に絶對觀念の露現したるときは、戯論の爭ひ覺醒して、一切の約束を脱して超然と絶對無罣碍の天地に透入せり。斯る無限の精神界を知らで束縛の夢中にイみし昔をおもふ。

之れ吾人が相待規定空間に時間因果に約束せられたる、生滅變易の妄界を出て、絶對無規の無限の靈界あることを知る。

慧眼による證明。絶對本質に對する直覺。直觀の對象なる絶對的觀念態。

肉眼に對する如き時間空間の因果律にしたがつて現する處の天然物象を超え、冥想直觀は一の觀念態なり。

寫象の連續的説話的を超えて、一切の物質的感覺を超え、宇宙本質に對する直觀なり。すべての相待因果の萬物を超え、純粹なる形式、一物もあるなし、絶對觀念態のみ。十方洞然として虛徹靈通、非内非外非中間、離一切差別。宇宙全體を盡して一體觀に達すれば、主觀客觀の差別亡じ、絶對的唯一の智慧光明態のみなり。彼もなく此もなく、能所致一、絶對無規、本來一體。

一切の用相を離れたる自性天真に對する直觀なり。

慧眼の證明する處を以て觀れば、如來の本質内容は絶對平等大智慧光明のみ。實は超絶無寄、言語道斷の處、是一切の内容を悉く除きたる純粹なる形式直觀なり。

作智とは本來自然無作の作智、是本質自性一切の用相を離れたり。
次に作智の用を顯す、法眼と及び其對象となり。

法眼乃至法身と及び法塵

法眼の對象を法界と名づく。作智の主觀の方面なる法眼法耳乃至法身を得る時は、慧眼に於て直觀せる無碍の觀念界中に、作智の妙用不可思議の用相として、靈的感覺顯現す。

淨教に説く處の微妙の莊嚴、至美の事相。衆寶嚴飾、恢廓曠蕩として限極すべからず、悉く相雜廁し轉相入間せり。光赫焜耀として微妙奇麗なり。清淨の莊嚴十方一切世界に超躡せり。衆寶の中の精なるものなり。

乃至法耳には常に自然微妙の法音をきゝ、法鼻には馥郁たる妙香を嗅ぎ、法舌には法喜禪悅の靈味に飽き、法身清淨にして形なきが如く、即ち虛無の身無極の體。

本來吾人は肉眼を以て之に相應せる物質分子運動の交渉によりて自然界を見聞す。

作智は本來如來の法界に周遍する用相にしあれば、慧眼には、之れに相應し一切處として一大觀念態のみ。法眼を以て觀ずる時は、處として至美清淨の莊嚴ならざるなし。

法眼乃至法身の對象とする所の法界自然微妙の莊嚴は、色に非ず非色に非ず、感覺心象是如來不可思議業の用相なり。

若し如來の用を離るゝ時は一切の感覺なし。然れども本質ある處必ず用あり。如來の智相は周遍の故に、一切色相もまた現ぜざる處なし。起信論に、諸佛自然の業ありて能く一切處に周遍せば、世間の人多く見ること能はざるや、の間に答へて曰く、如來法身平等に一切處に遍し、作意あること無し、故に自然と説く。但し衆生の心に依りて現ず。衆生心は猶し鏡の如し、鏡若し垢あれば色像現ぜず、是の如し、衆生の心に若し垢あれば法身現ぜざる故に。

是如來作智の妙用周遍し衆生の之に相應せる法眼開く處に顯現することを明しぬ。

吾人は法眼によりて知りぬ、如來の智相は一切處に本來周遍し、處として清淨法界ならざるなし、但衆生の心垢によりて觀ずること能はざるを。

佛眼乃至佛身によりて證明すべき佛界

佛眼等は本來如來の作智と全然一致したる處、佛眼を以て法界を觀する時は、見聞觸として佛界ならざるなし。宇宙本來如來蓮華藏界また常寂光土なり。

佛眼は慧眼と法眼とを統一し雙照するが故に、常寂光の大智慧界中に、衆寶莊嚴の事相を現じ、理事無碍なると共に、重々無盡の妙用あり。即ち一塵の中に盡十方界を觀じ、一塵の如く一切塵々また一切佛土を見る等。佛眼は五根互用、圓融無碍、佛眼は法界を盡して眼とし、また佛耳とし五根互用、圓融無碍。

十方法界一々塵一々芥子にも十方依正を現じ、如來常恒に說法し衆生を教化す。

一切萬物の中に一切の色聲香味觸の所現として、作智の妙用ならざるはなし。また一切諸佛の眼耳鼻舌身として作智の内面顯現ならざるはなし。

宇宙本如來の實體中に於て、衆生は自から本覺を失ふて妄に向ひ、自から妄境界を認めて宇宙の實相と謂へり。法華經に曰く「如來如實知見三界之相、無有生、死、若退若出、亦無在世及滅度者、非實非虛非如非異、不如三界見於三界、如斯之事如來明見、無有錯謬。」

又維摩經の意に曰く、「其心淨に隨つて佛土淨し」と。

舍利弗疑て曰く、吾佛世尊の土何が故にぞ斯の如く不淨なるや。吾此土を見るに丘陵、阮坎、荊

礫、砂礫、土石等諸の穢惡充滿せりと。時に梵王ありて舍利弗に謂つて曰く、汝是の言をなすなかれ。そは但汝が自から穢惡の國土を感ずるのみ。若し汝凡眼を捨て佛慧の眼を以て見る時は、必ず清淨國土を見むことを得むと。時に佛陀が足指を以て地に按くに、卽時に三千界若干百千珍寶を以て嚴飾せること、譬へば寶莊嚴佛の無量莊嚴等の如しと。時に佛陀舍利弗に告げてのたまはく、汝且く此佛土の嚴淨なるを觀るや。舍利弗言く、唯然り世尊本見ざる處聞かざる處、今佛土嚴淨にして悉く現ず。佛陀言はく、我佛土は常に清淨なること斯の如しと。

凡夫の肉眼を以て穢惡の土を感覺する處に於て佛陀は清淨佛土を觀ず。

前四眼を統攝し最高等に正しく作智の本質體用と一致せるを佛眼と云ふ。

起信論の不可思議業相

主觀客觀の感覺態なるものは、如來作智の兩面現なり。故に楞嚴に六處十二入十八界悉く如來藏妙眞如性なりと。

如來の成所作智は一大觀念が、意志に實現せらるゝ觀念態の分子的運動にして、衆生の感能に應じて

感覺を現す。生理機能の肉眼等によれば、それに相應せる物によりて感覺を生じ、心眼をもて直覺するときは、心靈界に善美の五感の象を感覺することを得。

作智を起信論には、不可思議業相と名づく。論に不可思議業相とは智淨相に依るを以て、一切勝妙境界を作す。所謂る無量功德の相常に斷絶なし。衆生の根に隨つて自然に相應し、種々に現じて利益を得しむる故に。義記に謂く、衆生の爲に六根の境界と作るが故に。寶性論に云く、如來の身は虛空の如く無相、諸の勝智者の爲には六根の境界と作つて微妙の色を示し、妙音聲を出し佛の戒香を嗅がしめ、佛の妙法味を與へ、三昧の觸を覺せしめ、深妙の法を知らしむ、故に妙境界と名づく。

作智は十方一切刹土及一切の萬有中、清淨國土不可思議の莊嚴の事相を現す。佛眼及法眼の感ずる處とす。

釋論に曰く、如來一念遍く三世に應じ、所應無始なる故に能應即ち無始なり。

又起信論に曰く、眞如の用とは（即作智）自然に不可思議の業種々の用あり。眞如と等しく一切處に遍す。然れども用相の得べき有ることなし。何となれば如來は唯是法身智相の身第一義諦にして、世諦の境界あることなし。故に作意の施作を離る。但衆生の見聞に益を得せしむるに隨つての故に、説いて用とす。

此用に二種あり。

一に凡夫の爲に應身を現す。凡夫は此色身を見て、是心作用の所現なることを知らず、全く外より來ると見とめて、單に色相のみを見る。是色相本如來智の所現なるを意識せざる故なり。二に菩薩の所見を報身と爲す。身に無量の色あり、色に無量の相あり、相に無量の好あり、所住の依果に亦無量種々の莊嚴ありて、示現する處に隨つて即ち邊あることなし、窮盡すべからず、分齊の相を離れ、其所應に隨つて常に能く住持して散せず失せず。

復次に凡夫の所見は、但其龜色なるのみならず、六道共に各其見る處の相同じからず。種々の異類と現じて受樂の相にあらず、故に應身と名づく。

是凡夫の肉眼は生理機能器械的なる故に、其れに應じて其の相を見ること同じからず、一水四見の例の如し。

菩薩は此色相は、眞如の智相より現じたるものと信知するが故に、彼の色相莊嚴の事は來もなく、去もなく、分齊を離る、唯心に依て現じて眞如を離れず。然れども此菩薩猶自ら分別して、未だ法身の位に入らざるを以ての故に、彼此の相を見る。若し淨心をうれば見る處微妙にして其用も轉た勝れたり。自他分別を離れて、究竟して彼此の相なく、唯一の法身となる。

菩薩は法眼を以て報身を見る。法眼の對象は報身即ち法の身にして、物質的色象にあらず。故に質碍的可割的にあらず。法眼の主觀が向上するに隨つて、對象の客體もまた増勝す。能觀に隨つて所觀の色相を見る。是如來作智が客體として示現したるものなり。若し淨心を得て彼此の相なきは慧眼の所見なり。慧眼は主客本同一本質の用相を離れたる相なるが故に。

又云く、問曰、若諸佛の法身。色相を離るれば、云何が能く色相を現ずる。答曰、即ち此法身是色の體なる故に、能く色を現ず。謂ゆる本より已來色心不二なり。色性即ち智なるを以ての故に、色體無形。説いて智身と名づく。智性即ち色なるを以ての故に、説いて法身一切處に遍ずと名づく。所現の色分齊あることなし。心に隨つて能く十方世界無量の菩薩、無量の報身、無量の莊嚴を示す。各々差別皆分齊なし。而も相妨げず。此心識分別の能く知る所に非ず。眞如自在の用の義なるを以ての故に。

密に聲字實相義

五大皆有響、十界具言語、六塵悉文字、法身是實相。

五大は聲の本體、音響則用なり。十界所有言語皆聲に由つて起る。聲文あり。音韻曲屈なり。文字

の九界は妄、佛界の文字は眞實なり。六塵とは色聲香味觸なり。色塵の文字とは顯形等の色内外依正に具す。一顯色とは五大色、黃白赤黑青、形色とは謂る長短、麤細、正不正、高下是なり。又方圓三角半月等。三に表色とは謂る取捨、屈申、行住坐臥是。又業用爲作轉動差別を云ふ。是らの三種色は是眼所行境界。又意識の境界、如是差別は是文字なり。

五大造色種子の色聚の諸法を説く。問一切諸法の生は自種より起こす。云何ぞ、諸の大種能く所造色を生ずと説く。云何が造色彼に依りて建立せられまた任持せられ、長養せらるや。答て、一切内外の大種と所造色の種子とは、皆内の相續心に依付す。乃至諸大の種子未だ諸大を生ぜざるに、造色種子〇〇造色を生ずること能はざるに由て彼生じて前導となる故に、此道理に由つて、諸の大種は彼の生因と爲ると説く。云何が造色彼に依るや。造色生じ已つて大種の處を離れずして、轉ずるに由るが故に。云何が彼に建立せらる、大種損益すれば彼同じく安危するに由るが故に。云何が彼に任持せらる、大種に隨つて等量にして壞せざるに由るが故に。云何が長養せらる。飲食睡眠修習梵行三摩地に因つて、彼に依つて造色復益増長するに由るが故に、大種を彼が長養の因と説く。是の如く諸の大種を所造色に望むに五種の作用あり。

復次に、色聚の中に於て曾て極微生なし。若し自種より生ずる時に唯聚集して生ず。或は細或は中

或は大、又極微集つて色聚成ずるに非ずや。但覺慧に由て諸色を分析し、極量邊際を分別し、假立して以て極微とす。又色聚に方分あらば極微も亦方分あるべし。然るに色聚には分あり、極微に非ず、何を以ての故に、極微即是分なるに由つて此是聚色の所有なり。極微に非ず復餘の極微あらん、是故に極微には分相あるに非ず。又不相離に二種あり。一に同處不相離、謂く大種の極微と色香味觸等と無根の處に於て離根の者あり。有根の處に於て有根の者あり。有根の處に有根の者あり。是を同處不相離と名づく。二に和雜不相離。謂即此大種極微と餘聚集の能造所造の色處俱なるが故に、是を和雜不相離と云ふ。又此遍滿聚色は應に知るべし、種々物を石を以て磨して末となし、水を以て和合し、互に相離れざるが如し。乃至又諸の色聚の中に於て、略して十四種の事あり。謂く地水火風色聲香味觸及び眼等五根なり。唯意所行色を除く。

十界依正色差別

内外依正具とは此に三あり。一に内色具顯形等三。二 明外色亦具三色。三 明内色非定内色、外色非定外色、互爲依正、内色と言ふは有情、外色とは器界。經云佛身不思議、國土悉在中。又一毛に多刹海を示現す。一々毛現ずること悉亦如是、普同於法界。又一毛孔内難思の刹あり等。微塵數種々住一一皆有遍照尊、在衆會中、宣妙法、於一塵中大小刹種々差別、如塵數一切國土、所有塵、一一塵

中佛皆入。

今此らの文に依て明かに知んぬ、佛身及衆生身大小重々或は虚空法界を以て身量と爲し、乃至一切大小の身土互に内外となり、互に依正と爲り、此内外依正の中に必ず顯形表色を具す。故に内外依正具と云ふ。

密家には法爾隨縁の二義あり。地水火風色聲香味觸及び眼耳等の五根は、是法爾、即ち天則にして、この五根五境本法性法然の徳なれば、衆生業道に由つて隨縁の差別あり。眼根の色塵を視るに、天則に罪垢あることなし。衆生隨縁の煩惱この色塵の爲に罪を造る。

密には法爾隨縁の作智あり

法爾とは法佛如來自性の境界、一切の五妙境界、法然の所成、即法佛の依正是なり。大日經に、大日世尊等至三昧に於て、即時諸佛國土地平なること掌の如く、五寶間錯し、八功德水芬馥盈滿せり。無量衆鳥鴛鴦鵲和雅の音を出す。時華雜樹敷榮、間列無量樂器、自然に韻に諧ひ其聲微妙にして、人聞くを樂ふ所なり。無量菩薩、隨福所感、宮室殿堂意生の座あり。如來信解願力所生なり。法界標幟の大蓮華を出現して、如來法界性身其中に安住せりと。此文には何の義を顯すや。謂く二義あり。一には法佛法爾の身土を明す。謂く法界性身法界標幟の故に。二、隨縁顯現を明す。謂く菩薩隨福所

感と。及如來信解願力所生の故に、謂く大日尊大日尊大日尊、乃法身如來なり。法身の依正は則法爾所成の故に法然有と曰ふ。若謂、報佛を亦大日尊故、曰「信解力所生」。又云、時彼如來一切支分無障。力從十智力信解所生無量形色莊嚴の相は報佛の身土を明す。若謂、應化佛大日尊と名づく。應化光明普照法界故得此名。或名釋迦、無數劫に六度の功德に資長せらるゝ身、此には應化佛の行願の身土を明す。若は謂く、等流身を亦大日尊と名づく。分に此義あるが故に。經に即時出現と曰ふ。此文は等流身の暫現速隱を明す。身已に有り、土豈無からん。此は等流身の身及び土を明す。上所説依正の土は並に四種身に通ず。若し堅の義に約せば、大小龜細あり。若し横の義によらば、平等にして、如是身及土並法爾隨縁の二義あり。故に法然隨縁有と曰ふ。如是諸色は皆悉く三種色を具し、互に依正と爲る。此は佛邊に約して釋す。

若し衆生に約して釋せば、若しは衆生亦本覺法身あり。佛と平等。此身此土は法然有而已。三界六道の身及土は業に隨つて有なり。是衆生隨縁と名づく。又經云、彼衆生界を染るに法界の味を以てす。即ち色の義なり。如加妙味此亦法然色を明す。是の如く内外の諸の色、愚に於ては毒と爲り智に於て藥と爲る。故に能迷亦能悟と曰ふ。是の如く法爾隨縁種々色等の能造所造云何、能生は五大五色、所生は三種世間なり。此は三種世間に無邊の差別なり。是を法然隨縁の文字と名づく。

四大智慧

絶對の本體を離れて一物の有るべきなし。此眞理によりて能く一切の法を攝し、一切の法を生ず。（起信にはアリヤを立つれども、彼は未だ方便を脱せず。今は眞實のみ）覺不覺共に此によつて生成す。

世界の衆生は此不可思議の體用の上に於て、自ら種々の妄想分別を以て業を起し、生死苦樂の現象を作る。

此智を自ら知らず、不覺の境界を現ず。盲人太陽の光中にありて物を見ること能はざる如し。

信論に不思議業相とは、智淨相に依るを以て、能く一切勝妙の境界を作す。所謂無量功德の相常に斷絶なし。衆生の根に隨つて自然に相應し、種々に現じて利益を得しむるが故に。寶性論に、如來の身は虚空の如く無相、諸の勝智の者の爲に六根の境界と作り、微妙の色を示現し、妙音聲を出し佛の戒香を嗅がしめ、佛の妙法味を與へ三昧の觸を覺せしめ、深妙の法を知らしむと。

記に、報化の二身眞如の大用、無始無終に相續して絶せず。金光明に應身とは無始より相續して斷

えざるが故に、一切諸佛不共の法能く攝持するが故に、衆生盡きざれば用も亦盡きず。故に常住と云ふ。

如來心身は法界に徧滿し、如來一念普く三世に應じて、所應無始なり。能く一念に應じ則無始。猶し一念圓智遍く達す。三世の境、境無邊の故に智も又無邊。無邊の智所現の相なるが故に無始を得、亦能く無終。此れ心識思量の測るところに非ず。故に不思議と名づく。

實を剋して論ずれば、十方三世覺不覺一切の所作皆是自然にして、如來の作を離れて有るもの有るなし。如來の作は無作の作、無作自然にして一切の所作を現す。六凡自ら不覺にして、あやまつのみ。能く自ら深く無邊光によりて觀ずるときは、悉く是如來一切能を離れて、宇宙間に動力の得べきもの有るなし。

個人先天に佛性即ち理性賦與せらるるといへども、如來大圓鏡智の光を與へざれば、（ ）全宇宙は是如來絕對觀念にして、この智光は世界及び萬物の絕對根底は彌陀なるを以て、世界の依屬を脱して絕對依屬の眞相を示さんがための光なり。

四智共に過境なる如來の智慧にして、直接に自己との關係なしと謂ふは甚だ非なり。如來の智慧は絕對にして自中存在なる個人の精神の中に、此光を現はして個人の根底は是如來なることを照見せし

むる光なり。個人とて個人其ものをいふに非ずして、自己を脱したる絶對をいふ。自己の一心の根本を離れて佗に如來を求むることなかれ。さればとて主我の中に求むるなかれ。主我は是罪惡の源なればなり。

大圓鏡智

超時間
超空間
絕對同時態

絕對觀念態

超感覺

主觀心象
客觀物象

十方三世一切色心の相象

物心二象

一切物心二相の本體にして
世界には主觀客觀物と心と
現象す

大圓鏡智

絕對觀念態
光普照十方三世
一切依正同體
在照智慧
大相

衆生主觀と客觀と現ず
物心二相の體にして衆生の
觀念を用とす

天 臺 三 觀

空

假

中

十界三千の
相と現る
十方三世十界三千
歷然差別
隔別

空假統照

大圓鏡智

平等性智

絶對理性

十方三世一切依正

世界相待性

色心の性

衆生の性特殊的

絶對圓性
世界相待性
衆生特殊性
(天理性)

平等性智

理性は萬物自己に自己を
統制する用と自發的性を
有す

天 臺 三 觀

性具十界
性本無性

三千

十方三世十界三千性

統照

智種切一

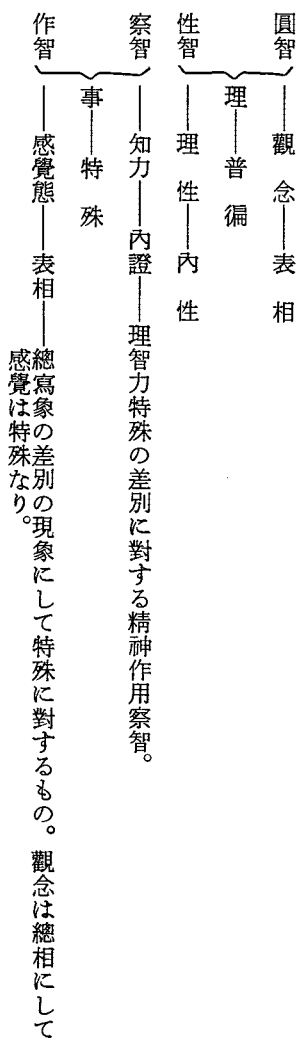
智種道

智種切一

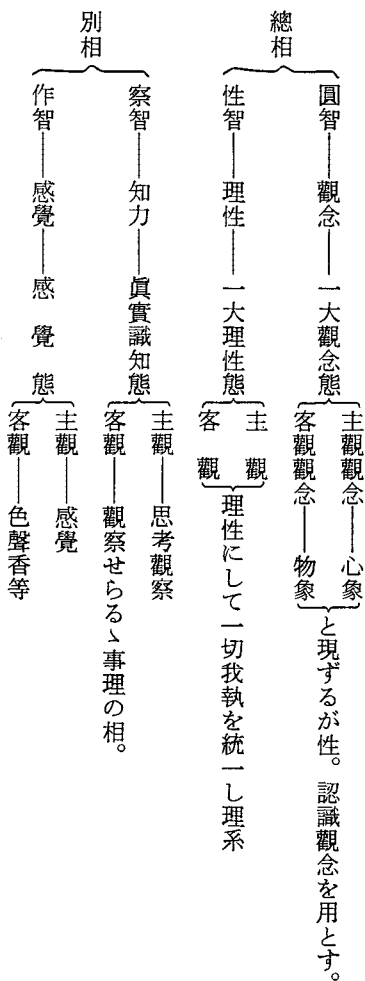
絶對理性は世界と衆生との自己内存の性。神の一切智内存。

世界性、世界には因縁因果の理法となりて秩序を整ふ、複雑極りなき萬物に條理の整然たるは理性内存すればなり。

性は自性任持法爾の理。自己内存の性を有して外部より規定すべきこと能はず。例へば人の小兒の生理上の眼に視覺聽覺の如き、自己の性が外部の養に由つて、自己本能が發達して視聽の用をなす。神の性を法性又は自性天真とも云ふ、之が相待世界には内存の天則理性と云ふ。一切有機中には目は視るの法則ある如く、又無機に火の熱き如く。



美感
 肉 生理的美感。
 靈 靈的美感。



宇宙の實體は絶對精神として、體と相と用の三大とすれば、體大は絶對精神にして、相大は觀念態、

用大は絶対意志とす。一大精神の二屬性なり。體あれば相あり。體には必ず能力あり。三大は本一體なり。

相大絶対觀念態は、一大精神を相の方面より研究するに、先づ四方面に分ちて説かん。其性と能とに於て便なればなり。即ち四智と名づく。一、大圓鏡智。二、平等性智。三、妙觀察智。四、成所作智。是れなり。

大圓鏡智は總相にして、絶対觀念態なり。平等性智は總性にして絶対理性態とす。妙觀察智は内容豊富の性相を啓示する慧の用にして、成所作智は内容を發表する感覺的作用なり。

四つある中、甲と乙とは總相普遍的にして、丙と丁とは差別的特殊的なり。

若し是を人の心理に分類せば、甲は觀念また寫象にして、乙は自我また理性に配し、丙は智力の思考觀察等にして、丁は感覺なり。然れども機制的心理の相待的個體なるとは、其性質に於て相ひ比例すべきも、絶対と相待、全體と個體、規定と無規定にして、固より同一の定相なりと云ふべからず。絶対心靈と相待的心象とは、絶対は主觀客觀を總合し、人の精神は主觀的の一方なれば、客觀の方面は間接に觀念し證明することを得るなり。